

高松市教育委員会・徳島文理大学文学部連携協定調査報告書第4冊

高松市内所在刳拔式石棺調査報告書 I

2021年3月

高松市教育委員会・徳島文理大学文学部

例 言

- 1 本書は、高松市内に所在する古墳時代の刳抜式石棺3基（三谷石舟古墳石棺、石船石棺、浅野小学校石棺）についての報告書である。
- 2 調査地、期間は、次のとおりである。
調査地・調査期間 三谷石舟古墳石棺（三谷町）：平成28年8月16日～9月1日
石船石棺（国分寺町）：平成29年8月17日～21日
浅野小学校石棺（香川町）：平成30年8月20日～22日
- 3 現地調査及び整理作業は、高松市教育委員会と徳島文理大学文学部が締結した連携協定に基づき実施した。
- 4 現地調査は、高松市創造都市推進局文化財課 文化財専門員 高上拓と、徳島文理大学文学部文化財学科教授 大久保徹也が担当した。
- 5 整理作業は大久保・高上が担当した。
- 6 本報告書の執筆は、第6章第3節を大久保が行い、第3章を大久保・高上が分担して行い、それ以外を高上が行った。編集は高上が行った。
- 7 発掘調査から整理作業、報告書執筆を実施するにあたって、下記の関係諸機関及び諸氏から御教示及び御協力を得た。特に國木健司氏（元高松工芸高校郷土史研究会）からは、氏らが実施した三谷石舟古墳の墳丘測量図等原図資料を寄贈いただいた。記して厚く謝意を表すものである。
浅野小学校 石船天満宮 國木健司 高松工芸高校郷土史研究会（有）鷲ノ山石材商会
- 8 標高は東京湾平均海面高度を基準とし、図中方位は座標北を指す。なお、これらの数値は世界測地系第IV系にしたがった。
- 9 遺構の縮尺については図面ごとに示している
- 10 上記で得られた全ての資料は、本書刊行後に全て高松市教育委員会で保管している。

目 次

第1章 刳抜式石棺の分布と現況	第7節 石棺の製作技法	22
第1節 分布状況と対象資料	第8節 石棺の劣化状況	23
第2節 現況と課題	第4章 石船石棺	
第3節 既往の調査・研究	第1節 調査の方法	24
第4節 文化財指定等の状況	第2節 石棺の形態	25
第2章 調査の経緯と経過	第3節 製作技法	25
第1節 調査の目的	第4節 破損状況の傾向	26
第2節 調査体制	第5章 浅野小学校所在石棺	
第3節 調査の経過	第1節 調査の方法	29
第4節 刊行物	第2節 石棺の形態	29
第3章 三谷石舟古墳石棺	第3節 製作技法	30
第1節 調査の方法	第4節 石棺の劣化状況	30
第2節 既往の調査との整合	第6章 まとめ	
第3節 後円部上面の現況と調査区設定	第1節 石棺の劣化状況の傾向	32
第4節 観察所見	第2節 三谷石舟古墳出土鉄鏃の編年的位置	32
第5節 採集遺物	第3節 三谷石舟古墳の築造時期と石棺製作時期	
第6節 石棺の形態	について	36

挿 図 目 次

図 1-1	香川県内出土の刳拔式石棺……………	1	図 3-7	三谷石舟古墳石棺実測図……………	20
図 1-2	高松市内 讃岐産刳拔式石棺の分布……………	2	図 3-8	石棺枕形状詳細図……………	21
図 2-1	連携協定書……………	9	図 4-1	石船天満宮境内平面測量図……………	24
図 3-1	三谷石舟古墳墳丘測量図……………	11	図 4-2	石船石棺実測図……………	27
図 3-2	後円部測量図と調査区位置……………	12	図 5-1	浅野小学校石棺実測図……………	31
図 3-3	後円部墳頂付近崖面断面図……………	14	図 6-1	三谷石舟古墳鉄鍬と県内の類例……………	33
図 3-4	調査区平・断面図……………	15	図 6-2	鉄鍬と銅鍬に見られる形態の規格性……………	34
図 3-5	土器・埴輪類実測図……………	17	図 6-3	規格性の弛緩した定角式鉄鍬の事例……………	35
図 3-6	鉄鍬実測図……………	19	図 6-4	三谷石舟古墳墳丘復元図……………	37

挿 表 目 次

表 1-1	香川県内刳拔式石棺一覧表……………	2	表 3-1	三谷石舟古墳 基準点一覧……………	10
-------	-------------------	---	-------	-------------------	----

本 文 中 写 真 図 版 目 次

写真 1-1	三谷石舟古墳 過去の撮影写真	写真 3-1	基準点遠景写真一覧
写真 1-2	石船石棺 過去の撮影写真	写真 6-1	池畔浸食面に見える墳丘構造
写真 1-3	浅野小学校所在石棺 過去の撮影写真		

巻 末 図 版 目 次

三谷石舟古墳 オルソ展開図	浅野小学校所在石棺 オルソ展開図
石船石棺 オルソ展開図①・②	

巻 末 写 真 図 版 目 次

写真図版 1	写真図版 5
三谷石舟古墳 清掃後状況 (南東から)	北トレンチ南端部断面 (東から)
三谷石舟古墳 石棺周辺の円礫集中状況 (南東から)	素地配合砂礫の様相 (図 3-5-1)
写真図版 2	素地配合砂礫の様相 (図 3-5-3)
三谷石舟古墳 南東側の縄掛突起	素地配合砂礫の様相 (図 3-5-4)
三谷石舟古墳 側面の突線	素地配合砂礫の様相 (図 3-5-5)
写真図版 3	素地配合砂礫の様相 (図 3-5-6)
三谷石舟古墳 石棺と円礫の位置関係 (南から)	素地配合砂礫の様相 (図 3-5-9)
南調査区完掘状況 (南から)	素地配合砂礫の様相 (図 3-5-10)
三谷石舟古墳 石棺と円礫の位置関係 (北東から)	素地配合砂礫の様相 (図 3-5-11)
三谷石舟古墳 崖面の盛土観察 (北東から)	素地配合砂礫の様相 (図 3-5-12)
写真図版 4	素地配合砂礫の様相 (図 3-5-15)
三谷石舟古墳 石枕 (南東から)	素地配合砂礫の様相 (図 3-5-16)
三谷石舟古墳 石枕 (北東から)	鉄鍬 M1
三谷石舟古墳 枕の立体感 (南東から)	鉄鍬 M2
三谷石舟古墳 北西側の小口 (北西から)	鉄鍬 M3
三谷石舟古墳 底面の調整 (鏡で撮影)	

写真図版 6

右側縁突帯の撓み
左側縁突帯の撓み
右側縁抉れ部の鑿痕
足辺突起部の鑿痕
右側縁斑文状劣化部
石枕外周隆帯の立上り
石枕外周隆帯の立体的装飾
棺上面頭辺の方形削込み
棺上面足部の半円形削込み

写真図版 7

石船石棺覆い屋の現況（南から）
石船石棺 現況（南西から）

写真図版 8

石船石棺 石枕周辺（南西から）
石船石棺 石枕下部の叩打痕（東から）
石船石棺 外面下半の叩打痕（南から）
石船石棺 縄掛突起の叩打痕（東から）
調査風景

写真図版 9

石船石棺 外面下半の剥離状況（南東から）
石船石棺 外面下半の剥離接写①
石船石棺 外面下半の剥離接写②
石船石棺 外面下半の剥離接写③
石船石棺 外面下半の剥離接写④

写真図版 10

鷺ノ山 石切丁場跡の崖面①
鷺ノ山 石切丁場跡の崖面②

写真図版 11

浅野小学校石棺 現況（北東から）
浅野小学校石棺 側面の突線（北東から）

写真図版 12

浅野小学校石棺 現況（西から）
浅野小学校石棺 小口破壊時の調整（北から）
浅野小学校石棺 内面底部付近の調整接写（北東から）
浅野小学校石棺 内面底部付近の調整（北東から）
浅野小学校石棺 石枕の遺存状況（北東から）
浅野小学校石棺 小口側に回り込む突線（北西から）

第1章 刳拔式石棺の分布と現況

第1節 分布状況と対象資料

讃岐地域では、古墳時代前期後半から刳拔式石棺の生産が知られる。石棺石材の岩石学的分析は近年なされていないが、既往の研究により高松市国分寺町鷲ノ山石と、さぬき市火山石に大きく区分して理解されてきた（藤田 1976）。讃岐地域内では、主に東側に火山石製の、西側に鷲ノ山石製の石棺が分布する傾向が指摘される。また、讃岐産石棺の一部は畿内をはじめとする遠隔地にも搬出される。続いて、本書では取り扱わないが、中期には阿蘇産の刳拔式石棺がもたらされている。これらを合計すると讃岐では現在 21 基の刳拔式石棺の出土が知られる。このうち、讃岐産の刳拔式石棺については、高松市内で 4 基が知られる。出土古墳が明確な事例として、史跡石清尾山古墳群中の石船塚古墳、三谷町に所在する三谷石舟古墳がある。石船石棺、浅野小学校所在石棺は、いずれも発見地から二次的に移動して現在地にあるため、帰属する古墳については不明である。なお、石船石棺については、名称を「石舟石棺」とする表記が現地看板等に散見される。現地の石船天満宮についても、「石舟天満宮」「石舟天神社」等の表記があり、多様な記載方法が認められるが、本書では「石船石棺」で統一する。同様に、三谷石舟古墳についても、「三谷石船古墳」とする表記も見られるが、本書では上記で統一する。

第2節 現況と課題

高松市内に所在する讃岐産の刳拔式石棺は、全てが野外に露出している。石材は軟質で今後も容易に劣化が進行する蓋然性が高い。一方で、今回の一連の調査によって、石棺表面には石枕や突線等の装飾のほか、よく観察すると表面に加工痕等が良好に残っている箇所が散見される。こうした痕跡は、石棺の製作工程を復元する上で重要であるが、実物に残る凹凸は極めて小さなも

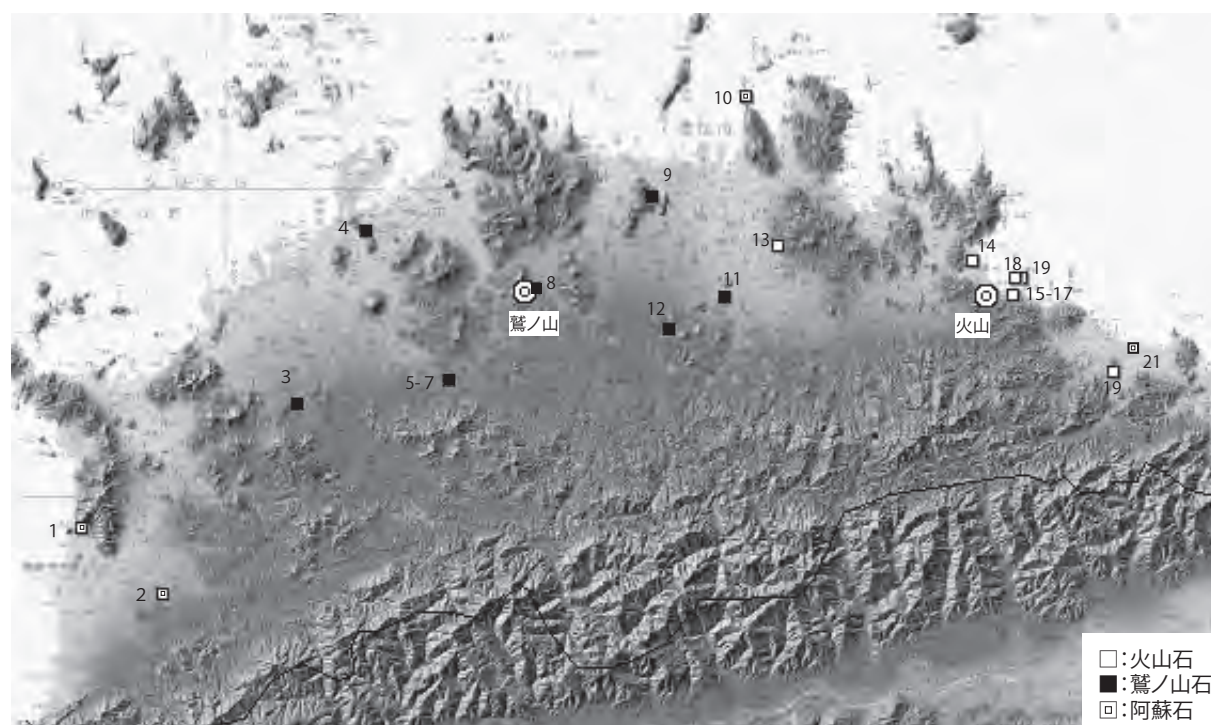


図1-1 香川県内出土の刳拔式石棺

表1-1 香川県内刳拔式石棺一覧表（図1-1と対応）

番号	古墳名	所在地	集成編年	墳丘	
				墳形	規模
1	丸山古墳	観音寺市室本	7	円	35.0
2	青塚古墳	観音寺市原町	7	方円	44.0
3	磨臼山古墳	善通寺市生野町字山相	4	方円	49.2
4	田尾茶臼山古墳	坂出市坂出町	6	方円	76.5
5	快天山古墳第一主体部	丸亀市綾歌町字東若狭・字畑田	3	方円	98.8
6	快天山古墳第二主体部	丸亀市綾歌町字東若狭・字畑田	3	方円	98.8
7	快天山古墳第三主体部	丸亀市綾歌町字東若狭・字畑田	3	方円	98.8
8	石船石棺	高松市国分寺町	—	—	—
9	石清尾山石船塚古墳	高松市峰山町	4	方円	57.0
10	長崎鼻古墳	高松市屋島	5	方円	45.8
11	三谷石舟古墳	高松市三谷町	4-5	方円	88.0
12	浅野小学校所在石棺	高松市香川町浅野	—	—	—
13	滝本神社裏古墳 西谷神社宮司宅在	高松市前田東町	—	—	—
14	岩崎山4号墳	さぬき市津田町南羽立	4	方円	58.0
15	赤山古墳？	さぬき市津田町鶴羽相地	3	方円	50.0
16	赤山古墳1号石棺	さぬき市津田町鶴羽相地	3	方円	50.0
17	赤山古墳2号石棺	さぬき市津田町鶴羽相地	3	方円	50.0
18	けぼ山古墳	さぬき市津田町鶴羽鶴部	4	方円	57.0
19	一つ山古墳	さぬき市津田町鶴羽	4	円	25.0
20	大日山古墳	東かがわ市町川東・白鳥北池	4	方円	38.0
21	岡前地神社古墳	東かがわ市湊	5	方円	92？

のである。表面の風化や摩耗といった、比較的小規模の劣化によっても毀損しかねない情報であるといえよう。こうした資料の特性と劣化の現状を踏まえて、保存対策を検討する必要がある。本稿は対策検討の前提作業として、現況の記録と詳細な表面観察を行うものである。

第3節 既往の調査・研究

香川県内出土石棺全体の研究史については、別稿にまとめたことがある（高上2010）。その後、東かがわ市岡前地神社古墳で新たに石棺が発掘される（東かがわ市教育委員会2019）等の資料増加はあるが、研究の状況は大きく動いていない。本節では調査対象とした石棺それぞれの過去の調査や研究の状況について概説する。

第1項 三谷石舟古墳石棺

三谷石舟古墳の既往の調査・研究



図1-2 高松市内 讃岐産刳拔式石棺の分布

については國木健司による整理がある（國木編 1992）。これを参照しつつ、近年の知見について加筆して整理する。

三谷石舟古墳の石棺に関する最も古い資料は、直接的な資料ではないものの近世後期に遡る。宝暦5（1755）年の調査記録に基づき、寛政9（1797）年に再調査を行い、その成果を文政元（1818）年にまとめた『池泉合符録』（『香川県史 10』近世資料Ⅱ解説参照）に「石船池」の記載があることから、近世後期には既に石棺が露出していたことが想定される。

石棺の報告の嚆矢は長町彰によりなされた（長町 1918）。その後、複数回の調査がなされ、（藤田 1976、香川県教委 1980、北山 2006）にそれぞれ実測図が掲載されている。認識の差異として大きいのは、縄掛け突起の形状・枕の形態の細部についてである。縄掛け突起については地表に埋没した状態かどうか、現況が破損状態か原形かといった点の認識の相違が図中に表れている。また、北山は枕表現の型式組列を検討し、三谷石舟古墳石棺の枕を最初段階に位置づけている。

過去に撮影された写真について、高松市では高松工芸高校郷土誌研究会より寄贈された写真を有しており、1991年段階の石棺の様子が見える（写真1-1A・B）。また、このほかに撮影年不詳の写真を2枚（同C・D）保管しており、写真1-1Dでは石棺内の計測を行っている様子が見える。現在も石棺は身がやや斜めに起き上がるように接地するが、少なくとも写真からは近年こうした状況が大きく変化していないことが読み取れる。

第2項 石船石棺

当石棺についての出土の経緯や研究状況は『さぬき国分寺町史』に詳細な整理がなされており（蔵本 2005）、これを参照しつつ以下を記述する。石棺の資料上での初見は「鷲峰寺領庄内名々文帳」



写真1-1 三谷石舟古墳 過去の撮影写真



写真 1-2 石船石棺 過去の撮影写真

等の文献に見られる「石船」の記載から、中世末頃には石棺が露出していた可能性が高いことが指摘される。近世後期には、文政 11（1828）年に刊行された『全讃史』、嘉永 6（1853）年の『讃岐国名勝図絵』に石棺についての記載が見られる。なお、石棺は現在地のやや南東に位置する石舟池の湖畔にあったものを、明治 42（1909）年に現地（石船天満宮境内）に引き揚げて祀ったものである。現地に移設されたのち、神社の祭祀対象として維持されるが、昭和 45 年に町指定文化財に指定されたことを契機に、覆屋・柵・説明板・標柱が町によって設置される。

石棺の保護の為の上記施設であるが、高松市が所有する（国分寺町から引きついで）写真アルバムに格納された写真からは段階的な整備がうかがえる。すなわち、①当初は神社境内の一段高い箇所に露天で設置された段階（写真 1－2 A・B）、②周囲に玉垣が整備された段階（同 C・D）、③覆屋が整備された段階（同 E・F）、④石棺を地面から浮かせ、間に 2 石の石材を噛ませる段階（現在）（同 G・H）である。②から③の間に、石棺の上に置かれたラントウが移動されたことが分かる。このラントウは現在では隣接する神社本殿石垣の上に設置される。また、③と④の間に、石棺沿いのコンクリートブロック塀も設置されたことが見て取れる。写真の撮影年月日が明確でないため、読み取れる情報から可能な限り整理すると、①は A に町指定文化財の標柱が見えることから昭和 45 年以降であることがわかる。覆屋については、平成 17 年に刊行された『さぬき国分寺町誌』掲載の写真には認められることから、これ以前に設置されたものであることが分かる。

石棺周囲の保存対策施設は上記のとおり段階的に整備されたことがわかるが、本書で整理するように石棺の特に下半において毀損が著しい。上記の保存対策が少なくとも結果としては期待する効果を発揮していないことが明白であるため、対策の検討は改めて行う必要があるだろう。この点については別稿で整理したい。

石棺に対する研究としては、特異な形態の石枕に着目し、石棺の初源的な形態とする見解（藤

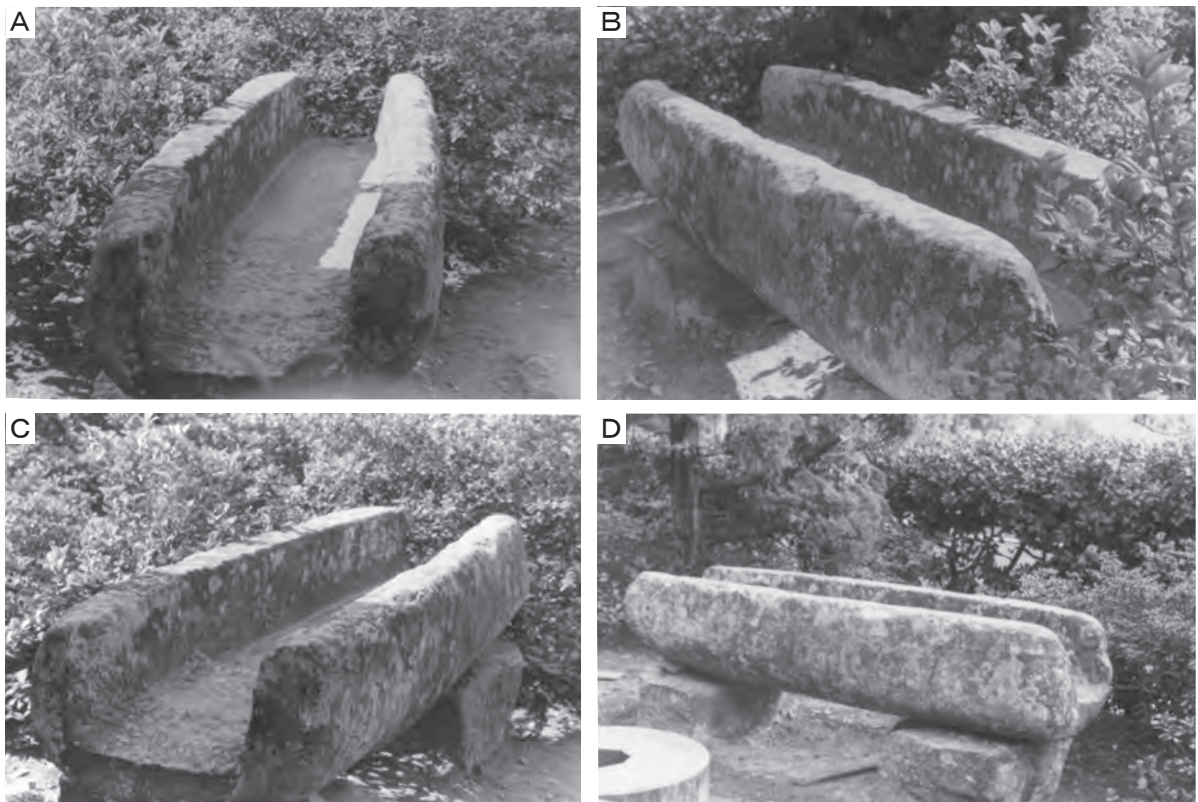


写真 1－3 浅野小学校所在石棺 過去の撮影写真

田 1977) と、石棺の未製品とする見解 (渡部 1995) が提示され、現在では後者を支持補強する見解が提示される (蔵本 2005)。鷲ノ山という石棺材産出地に至近の位置における未製品として、石棺生産の具体的様相を示す稀有な資料と評価されてきた。

第3項 浅野小学校所在石棺

以下の整理は船岡山古墳群の発掘調査報告書 (高松市教育委員会・徳島文理大学文学部 2017) を整理する際にまとめた文書を基に記述する。

当石棺の文献上の初見は、長町彰による石棺の紹介である (長町 1918)。長町は、地元の伝聞として、浅野小学校所在石棺が、船岡山から発掘されたことを紹介している。笠井新也は大正 5 (1930) 年 7 月に浅野小学校所在の石棺を訪ねて、現地を踏査している (笠井 1933)。当時向井又八氏の所有地において、石棺が用水の樋として使われていたことを報告するとともに、当時の関係者として、地元の古老の談話を掲載している。概要としては、石棺は船岡山の頂上から掘り出されたもので、発掘の年代は覚えていないが、7、80 年前も昔のこと (筆者注：聞き取り当時基準) であろう。当時発掘に立ち会った人は一人もいないが、当時の状況を実見した人たちからの伝聞では、石棺が掘り出された時には、周囲に無数のカンカン石 (筆者注：安山岩板石) が積み重ねてあった、との内容である。寺田貞次も浅野小学校石棺の紹介を行っている (寺田 1935)。香川町史 (香川町 1968) には、昭和 8 年の国道拡張工事で石棺が浅野小学校に移動されたことが記載されている。その後、香川県教育委員会により実測図が作成され、公開された (香川県教育委員会 1980)。

上記のように、浅野小学校石棺は地元の伝聞及び転用元の立地から、船岡山古墳群に帰属する可能性が高いものと考えられていたが、平成 20 年から実施した発掘調査によって、船岡山 1 号墳の築造時期が古墳時代前期前半新相に位置づけられることが明らかとなり (2 号墳は未確定)、石棺の年代と齟齬をきたすことが判明した (高松市教育委員会・徳島文理大学文学部 2017)。周辺では前期古墳は他に知られておらず、浅野小学校石棺の帰属は改めて不明とせざるを得ないのが現在の状況である。

高松市では合併時に香川町から引き継いだ写真アルバムがあり、その中に収録された写真 (昭和 45 年撮影、写真 1-3) から現在までの環境変化をみると、浅野小学校校庭の、周囲に草木が繁茂した花壇状の区画に設置されている環境は変わらない。また、設置の際に大型の方形石材 2 点の上に設置している点も変化はない。ただし、石棺と地面の距離が明らかに接近している。周囲からの土壌流入による埋没が進んだためか、基礎の石材を小さなものに交換したためか、周辺の花壇整備により地面が嵩上げされたためか確定はできないが、いずれにせよ石棺と地面との距離に変化があったことは動かない。当石棺も下半を中心に劣化が進行しており、保存対策は改めて検討する必要がある。

第4節 文化財指定等の状況

第1項 三谷石舟古墳石棺

石棺そのものの文化財指定はなされていないが、墳丘の大半が高松市に寄贈されたことを契機に、平成 26 年に高松市史跡に指定され、その構成要素として現地に保存されている。

第2項 石船石棺

昭和 45 年 3 月に旧国分寺町指定文化財 (有形文化財・建造物) に指定された。指定名称は「石棺 (石船石棺)」であった。平成 18 年に国分寺町が高松市と合併するにあたり、高松市文化財保護審議会に諮り、「鷲ノ山が古墳時代の石棺の生産地であったことを示す重要な資料であり、

市指定でよいと考えられる。」とされ、高松市指定文化財として引き継がれた。高松市指定文化財の名称は「石船石棺」である。

第3項 浅野小学校所在石棺

昭和61年3月に旧香川町指定文化財（有形文化財・考古資料）に指定された。指定名称は「船岡古墳出土石棺」とされた。平成18年に香川町が高松市と合併するにあたり、高松市文化財保護審議会に諮り、「石棺は、市内では国分寺町や三谷石舟古墳にも所在する。この石棺は舟岡古墳出土と伝わっているが、近年の舟岡古墳調査でその可能性が低くなり、また、両端が無く、他のものと比べると資料的価値は低いことから、市指定・登録文化財には無理がある。」との理由により市指定文化財として引き継がれなかった。このため、現状では文化財としての指定はなされていない。

《参考文献》

- 香川県教育委員会 1980『香川町・船岡山古墳調査報告』
香川町 1993『香川町誌』
笠井新也 1933「讃岐国石清尾山の石塚に就て」『考古学雑誌』23 - 12
北山峰生 2005「舟形石棺小考」『玉手山古墳群の研究』V - 総括編 - 柏原市教育委員会
北山峰生 2006「磨臼山古墳石棺をめぐる一試考」『香川考古』第10号特別号 香川考古刊行会
京都帝国大学 1933『讃岐高松石清尾山石塚の研究』
國木健司編 1992『三谷石舟古墳測量調査報告書』高松工芸高校郷土史研究会
蔵本晋司 1995「香川県高松市三谷石舟古墳の再検討」『香川考古』第4号 香川考古刊行会
蔵本晋司 2005「鷲ノ山石棺からみた讃岐の前期古墳と対外交渉」『さぬき国分寺町誌』国分寺町
高松市教育委員会・徳島文理大学文学部 2017『船岡山古墳群Ⅰ』
高上拓 2010「四国」『日本考古学協会 2010年度兵庫大会研究発表資料集』日本考古学協会 2010年度兵庫大会実行委員会
寺田貞次 1935「讃岐に於ける前方後円墳」『考古学雑誌』25 - 5
長町彰 1918「讃岐国に於ける石枕ある二三の石棺について」『考古学雑誌』9 - 1
長町彰 1928「讃岐考古集録」『考古学雑誌』18 - 2
東かがわ市教育委員会 2019『岡前地神社古墳』
藤田憲司 1976「讃岐（香川県）の石棺」『倉敷考古館研究集報』第12号 倉敷考古館
細川晋太郎 2006「刳拔式石棺の創出」『香川考古』第10号特別号 香川考古刊行会
六車恵一 1965「讃岐津田湾をめぐる四、五世紀ごろの謎」『文化財協会報』特別号7
横田明日香 2006「讃岐における舟形石棺の一樣相」『香川考古』第10号特別号 香川考古刊行会
渡部明夫 1990「讃岐の刳拔式石棺について」『香川史学』第19号 香川歴史学会
渡部明夫 1994「四国の刳拔式石棺」『古代文化』第46巻第6号
渡部明夫 1995「香川の刳拔式石棺 - 石棺の創出と移動 -」『瀬戸内海地域における交流の展開』古代王権と交流6 名著出版
渡部明夫 2002「付章2 快天山古墳石棺の再検討及び最近の刳拔式石棺の調査例について」『岩崎山4号墳・快天山古墳発掘調査報告書』津田町教育委員会・綾歌町教育委員会

第2章 調査の経緯と経過

第1節 調査の目的

高松市では、史跡石清尾山古墳群の保存活用事業に着手しており、緊急性の高い課題として、現在露出している石船塚古墳石棺の保存対策を検討している。石船塚古墳の石棺は、後円部中心で露出しており、蓋は近代に二次的に移動していることが明らかであるが、身については原位置を保っている可能性がある。考古遺物としての石棺の性格とともに、史跡の一部を構成する石棺としての位置づけもあり、その保存対策として、どのような手法が適当であるのかを検討する必要がある。対策を検討するにあたって、比較資料として市内に所在する他の3基の石棺の劣化状況を記録するとともに、想定される劣化要因と適切な保存対策の検討を行うこととした。具体的には、①石棺の現状での破損状況の記録、分析②石棺の周辺環境の調査と分析を行うこととし、①については考古学的な視点から、②は自然科学的、岩石学的な視点からの分析を行っている。なお、①については徳島文理大学文学部文化財学科と、②については独立行政法人奈良文化財研究所と連携協定を締結し、共同で事業を推進している。本書は①の考古学的調査についての報告書である。

第2節 調査体制

高松市教育委員会と徳島文理大学文学部は、平成22年2月1日に連携協定を締結しており、今回の調査は協定に基づき実施した(図2-1)。分担としては、三谷石舟古墳基準点測量業務は高松市が発注し、各石棺の三次元写真測量は徳島文理大学文学部が発注している。なお、高松市教育委員会の調査は、文化庁の市内遺跡発掘調査事業の補助金を受けて実施している。

高松市教育委員会の調査担当者は例言のとおり。徳島文理大学文学部の調査参加者は以下のとおり。
平成28年度:中嶋美佳、瀧川未来、日野優香、山本和輝、高瀬崇宏、次田裕、松本就也、松本恭輝、丸山孝恭、森大樹、山崎徹、植松弥生、北川遥子、森本歩美
平成29年度:真鍋凜太郎、山崎直也
平成30年度:伊内美伊、松本卓磨、吉積惇

第3節 調査の経過

対象古墳を選定したのち、調査着手順を上記のとおり定め、作業を実施した。作業は大学の夏季休暇期間を主に利用して実施しており、必要に応じて追加作業を行った。

三谷石舟古墳では、石棺の清掃・観察とともに、後円部上の位置及び石棺と埋葬施設の関係を確認するため、一部トレンチ状に下草の除去による観察を実施した。

石船石棺・浅野小学校所在石棺は、石棺の清掃・表面観察・図化を行っている。石船石棺の調査に際しては、石船天満宮の総代に承諾いただき調査を実施した。浅野小学校所在石棺は、浅野小学校に校庭内での作業の許可をいただいた。

第4節 刊行物

成果の概要は高松市市内遺跡概報で報告している。

高松市教育委員会 2017 「三谷石舟古墳」『平成28年度市内遺跡発掘調査概報』

高松市教育委員会 2019 「石船石棺」『平成30年度市内遺跡発掘調査概報』

高松市教育委員会 2019 「浅野小学校所在石棺」『平成30年度市内遺跡発掘調査概報』

徳島文理大学文学部と高松市教育委員会との連携協力に関する協定書

徳島文理大学文学部（以下「甲」という。）と高松市教育委員会（以下「乙」という。）とは、相互に連携し、研究交流を促進することにより、高松市における学術・文化の進展に寄与するため、次のとおり協定を締結した。

（目的）

第1条 この協定は、甲および乙の所管する機関が、相互の連携による学術交流および技術交流ならびに人的交流を通して、学術・文化の進展を図ることを目的とする。

（事業）

第2条 甲と乙は、前条の目的を達成するため、次の事業を推進する。

- (1) 学術研究情報の交流に関する事業
- (2) 共同調査・研究および委託研究に関する事業
- (3) 調査・研究成果の公開活用に関する事業
- (4) 学生の教育、研究等に関する事業
- (5) その他前条の目的を達成するために必要な事業

（経費負担）

第3条 前条に掲げる事業に係る経費の負担については、甲と乙で協議して定めるものとする。ただし、別述法令等の定めがある場合は、当該法令等の定めるところによる。

（知的財産権の取扱い）

第4条 甲と乙の共同調査・研究等によって生じた知的財産権の取扱いについては、甲と乙が協議の上、別に定めるものとする。

（遵守義務）

第5条 甲または乙の職員および学生（以下「職員等」という。）が、相手方の施設において調査・研究等に従事する場合は、甲または乙の指定する者の指示に従わなければならない。

（事故責任）

第6条 職員等が、調査・研究等に従事している際に発生した事故については、その発生状況等について調査し、甲と乙が協議し、対応するものとする。

（損害賠償）

第7条 職員等が、相手方の施設において研究等に従事している際に、機器等を滅失し、またはき損し、もしくは第三者に損害を与えた場合は、その発生状況等について調査し、甲と乙が協議し、対応するものとする。

2 前項の損害賠償額については、甲と乙が協議の上、決定するものとする。

（守秘義務）

第8条 職員等が、この協定に基づき調査・研究等に従事している際に知り得た秘密は、他に漏らしてはならない。ただし、事前に相手方の承諾を得た場合は、この限りでない。

（研究成果の公表）

第9条 甲および乙が、この協定に基づき実施して得た研究成果は、原則として公表するものとする。ただし、公表については事前に甲、乙協議して決定するものとする。

（定めのない事項等の処理）

第10条 この協定に定めのない事項またはこの協定の条項に疑義が生じたときは、甲と乙が協議の上、決定するものとする。

この協定を証するため、本書2通を作成し、甲、乙記名押印の上、各自1通を保有する。

平成22年 2月 1日

甲 徳島文理大学
学長 桐野 豊

乙 高松市教育委員会
教育長 黒川 康嘉

図2-1 連携協定書

第3章 三谷石舟古墳石棺

第1節 調査の方法

三谷石舟古墳石棺は現在、市指定史跡三谷石舟古墳の後円部上に所在する。調査開始前の観察では、石棺内に雨水が溜まり、苔や藻類が表面に茂っていた。また、周囲は林となっており、落葉が厚く堆積して石棺の一部を覆い隠していた。詳細な観察を行うに当たって表面清掃を行うこととした。表面清掃は水と柔らかなスポンジを用いて行い、表面を傷つけないよう注意して実施した。

表面清掃と同時に、石棺周囲の地形測量を行った。これは、今後保存方法を検討するにあたり、移動の可否についてが主要な論点になることが想定されたため、石棺下部に埋葬施設が存在するか、存在した場合にはどのような位置関係にあるかの確認が必要であると判断したためである。このため、石棺が所在する後円部墳頂部に限定し、10 cm等高線による地形測量を行った。あわせて、調査区を設定し、地表の落葉等の除草により石棺周辺の状況を確認することとした。これらの記録のため、新たに基準点を設定し、測量した。基準点は表3-1のとおり。T1・2は道路上に丸頭のピンを打ち込んでおり、K1～3はプラスチック杭である。

表3-1 三谷石舟古墳 基準点一覧

点名	等級	X座標	Y座標	標高	備考
T1	3級	141036.422	52906.804	41.233	世界測地系IV系
T2	3級	140955.700	53031.724	41.646	
K1	4級	140954.406	52949.190	47.094	
K2	4級	140944.987	52956.505	46.997	
K3	4級	140931.248	52980.175	41.147	

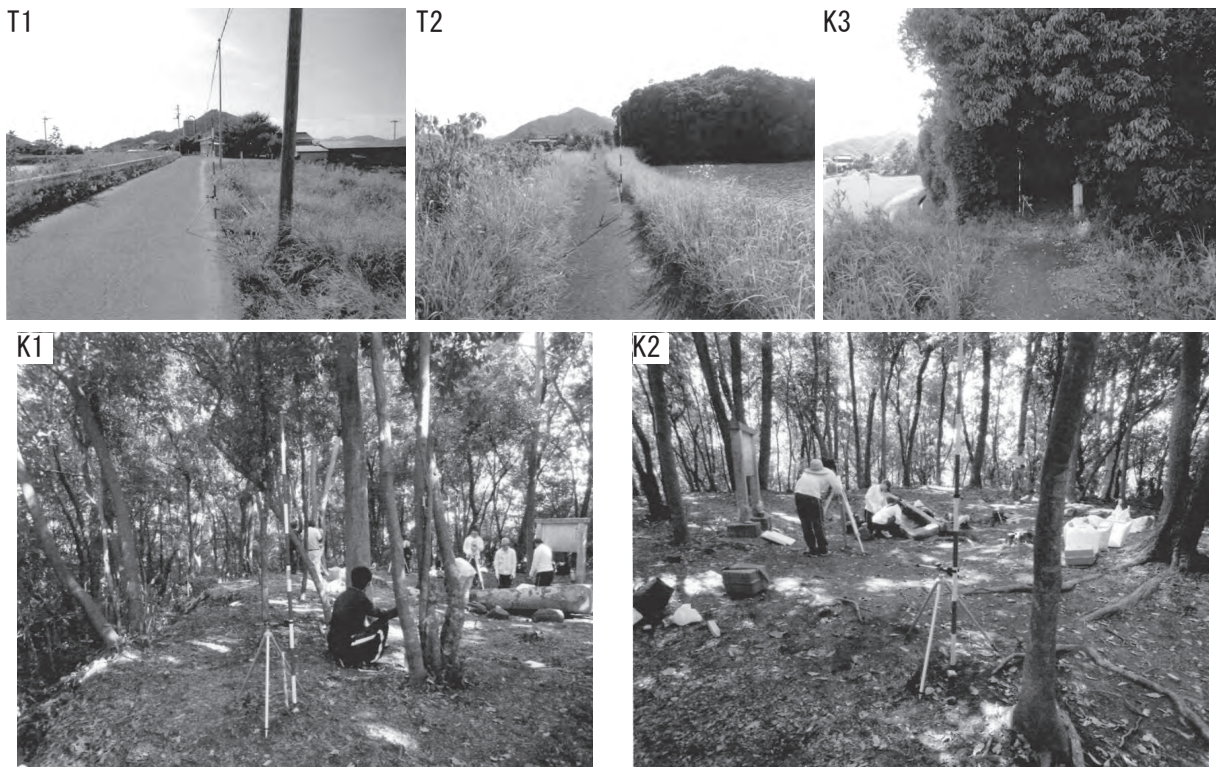


写真3-1 基準点遠景写真一覧



図3-1 三谷石舟古墳墳丘測量図 (高松工芸高校郷土史研究会 1992 を改変して作成)



図3-2 後円部測量図と調査区位置

表面清掃後、石棺の形状と現状を記録するために、フォトスキャンを用いた写真測量を行った。写真測量の方法をやや詳細に記すと以下のとおりである。まずは、コンパクトデジタルカメラを用意する。多量の写真を撮影することになるため、一枚辺りの解像度はそれほど大きくなくてよい。今回は、1枚当たり1～2Mb以下の容量で撮影を行った。また、連続して撮影するため、手ブレ防止機能を有効にした。撮影にあたっては、まず座標値をもたせた対標（ターゲット）を石棺及び周辺に設置する。写真の合成を有利にするため、あらゆるアングルからの撮影でも一画面に複数のターゲットが写り込むように配置を工夫する。今回は合計16箇所のターゲットを設置した。内訳は石棺の上面に8点、周辺の地面に8点である。点数についてはやや多すぎたかも知れない。地面に設置したものは釘で固定し、石棺上に設置したものは粘着力を弱めたテープで仮止めし、計測後速やかに除去した。ターゲット設置が完了すると、写真撮影を行う。撮影した写真は、日光の陰影に大きく影響を受け、写真合成の成果に直結するため、曇天を選んで均一な光線の際に撮影を行うか、人工的にシート等で陰を作って撮影しなければならない。写真は、対象を可能な限り全方位から撮影する。まずは全体を引きのアングルで広く撮影したのちに、表面の調整や剥離が明瞭に写るようある程度接写を行う。接写の際には、連続する写真の画角の一部が重複することを意識して、少しずつ移動しながら撮影する。感覚的な話だが、この際には小さく横に1歩ずつ撮影しながら対象を全周した。また、高さも視線高さ、肩高さ、腹高さ、腰高さ、膝高さ、地面設置とそれぞれ変えて全周撮影を行った。留意点としては、底面は画角が確保できず、広く撮影できないため、写真

のオーバーラップを意図的に大きくして、多くの枚数を撮影した。このように意識しても、底面はどうしても不鮮明にならざるを得ない。撮影が完了すると、設置したターゲットの座標値（X、Y、Z）を計測して記録する。この座標値は、国土座標値であれば他の測量図と合成することもできるし、単独で任意の基準点からの仮座標値でも写真の合成はできる。今回は任意の点からの仮座標値で計測した。撮影した写真と座標値を元に、フォトスキャンで合成する。合成業務は文理大文学部が（株）四航コンサルタントに委託発注した。

フォトスキャンによる合成で、石棺各面のオルソ画像を作成し、展開図にする。展開図を元に、再度現場に持参して、表面観察を行い、形態・破損状況・表面の調整等の観察所見を展開図に書き込む。この際、図面の浄書を意識して展開図にトレーシングペーパーを掛け、その上に鉛筆で所見を書き込む方法を使った。これらを持ち帰り、浄書したものが図3-7である。（高上）

第2節 既往の調査との整合

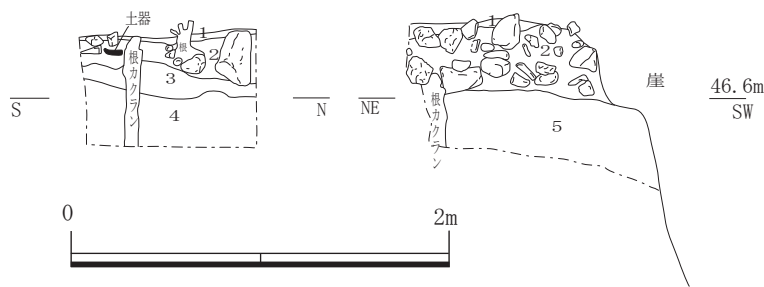
三谷石舟古墳の墳丘測量については、第1章のとおり、高松工芸高校郷土史研究会による測量図が提示されている。本書の作成にあたり、同会代表國木健司氏より調査時の原図等資料の寄贈を受けており、高松市教育委員会で保管している。さて、この墳丘測量図は25cm等高線で描かれているが、今回作成した墳頂部の測量図と比較すると、地形理解には大きな齟齬が無いことが分かる。一方問題なのは、標高に大きな差が生じている点である。今回（株）四航コンサルタントに委託して3級・4級基準点を設置しており、新規に作成した基準点を元に測量を行っている。異なる水準点を用いたことによる測量誤差がまず考えられるが、後円部墳頂で約1.5mの差が生じている。この差は測量誤差とするにはかなり大きい。新たな測量基準点を元に墳丘全体の測量を再度実施するのも必要な作業であろうが、労力に比して得るものの少ない作業になりかねない。このため、弥縫策であるが高松工芸高校郷土史研究会作図の等高線図を基本図として利用し、等高線の数値から単純に1.5mを加えた数値を標高地として利用することとしたい。図3-1はこの点を修正して再トレースした図である。（高上）

第3節 後円部上面の現況と調査区設定

後円部上面では北西-南東辺と北東-南西辺の二辺が直線的に切り取られ、その外縁は高さ2m内外の崖面をなす。また対向方向の二辺には比高0.3m内外のごくかすかな土堤状の高まりがL字形にめぐり、結果として墳丘主軸に斜交する17m四方の矩形平坦部が二次的に形作られている。

やや東寄りで墳丘主軸に斜交して概ね東西方向で鷲ノ山石（角閃石安山岩）製の刳抜式石棺の棺身が位置する。棺蓋の所在は不明。棺は頭辺側が斜めに浮き上がり、明らかに原位置ではない。分解未了の落ち葉や樹枝片を主とする腐植土が後円部上面全体を浅く覆い、棺の足辺はこれに浅く埋もれる。棺周辺には概ね拳大程度の円礫多数が集中する。さらに一辺数十cm前後の塊石が、一部は腐植土に載りあるいは突き出すように数個が石棺の周辺に散在する。過去に棺蓋材残片と報告されたが、棺材とは石材種を違えている。また上述の北東側崖面の中程に近年の倒木で抉れが形成され、露面では盛土層上、腐植土直下に土器片を伴う円・角礫の薄い堆積が観察された（写真図版3右下、図3-3）。

石棺周辺の円礫群は板石材若干も伴い埋葬施設に由来する可能性が想定されたため、後円部中心点から墳丘主軸及び直交方向に限定的な調査区を設け、地表の腐植土層を除去し礫群の広がりを追



1. 表土
2. 灰白細砂にΦ5～15cm大の砂岩円礫を10%、地山礫？（角ばった軟質の凝灰岩 or 安山岩）を（Φ10～25cm大）30%、安山岩板石（Φ10cm程度）含む、しまりなく乱雑な混和、土器片多く含む
3. 明黄褐シルト～極細砂、円礫等を含まず、ブロック土を斑に含む→盛土か
4. 橙褐シルト～極細砂、円礫等を含まず、ブロック土を斑に含む→盛土か
5. 3・4層に対応するが根及び崖面崩落に伴う攪乱で分層しがたい

図3-3 後円部墳頂付近崖面断面図（位置は図3-2に対応）

究した。将来的な埋葬施設把握に向けて、今回はいわば予備的な観察を企画したものである。後円部中心点から主軸方向に東・西調査区、直交方向に北・南調査区を設けた。各々幅1mで立木等の障害物を除ける形で北調査区は上面の北縁まで延長10m、東調査区は東縁部の手前まで延長6.5mとした。立木に阻まれた南調査区は延長3.5m、西調査区は説明板を避けて中心点より3.5m離して延長1.5mで設定した。基本的に表層腐植土の除去・観察にとどめたが、北調査区石棺と礫群の関係を南端部で確認した（図3-4）。（大久保）

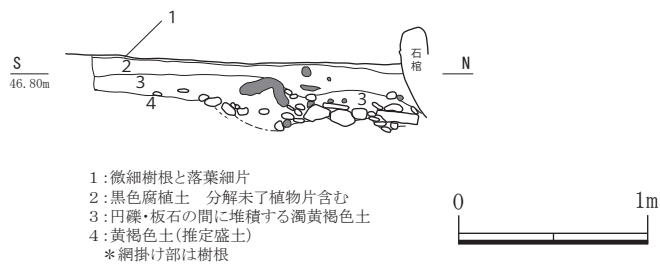
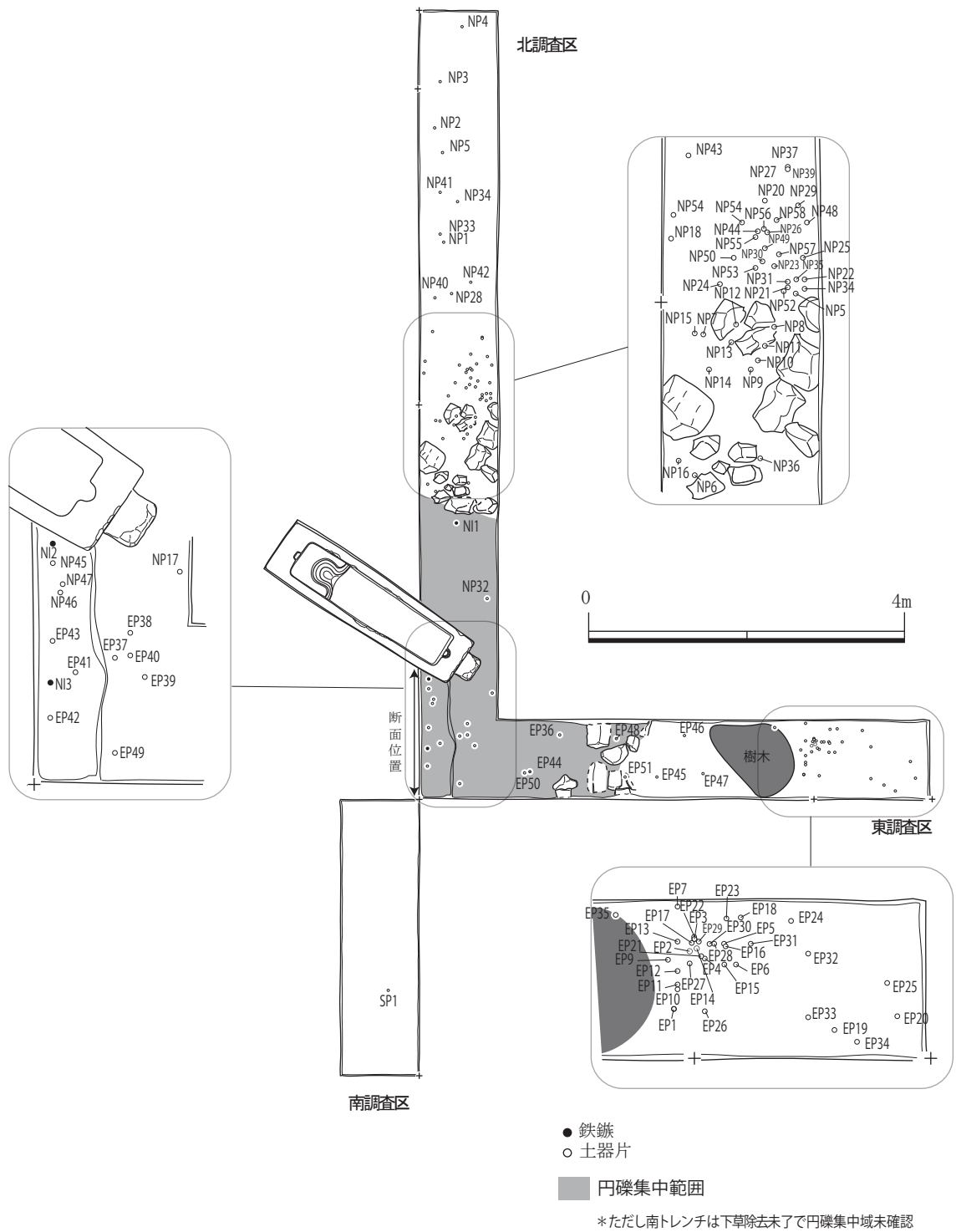
第4節 観察所見

表層腐植土を取り除けると北調査区では南端より3.5～3.6mまで、東調査区では約2.5mまでの範囲で円礫が集中した。その縁辺に各々一辺数十cm前後の塊石が帯状に並ぶ。北調査区では石棺が盛土層上に直に置かれ、なんら据え付け構造の痕跡が見いだせないこと、つまり現状が本来の棺埋置状況を反映しないことをあらためて確認した（写真図版3上）。円礫や若干の板石は棺体に接して薄く乱雑に堆積する。移設した石棺の周囲に小礫を集めその外周に塊石を置き並べているわけで、これらも明らかに石棺開掘後の二次的な所産である。

礫群の集中域外方でも腐植土直下では締まりのない褐色土に半ば埋もれ円礫などが散在する。西・南調査区では同様の状態が全面で観察された。今回はこれ以下を掘り下げずに追究を終えている。

以上の調査範囲で少数の鉄器・土器類を検出した。前者-鉄鏃-は明らかに副葬品の一部であろうが、全てが石棺周辺の円礫群中で検出した（図3-4）。この点からもこの円礫群は埋葬施設に由来するとみなしてよいだろう。一方、中形広口壺などの土器類は一部が円礫群に混在するが、多くはその外方、つまり外周の土堤状微隆起部から見出された。墳頂にあった土器類が墳丘上部を突き崩し埋葬施設を破壊した際の掘り崩し土に混入し、事後にそれらが後円部削平面に盛り付けられたものと推測できる。

後円部上面に見出される多量の円礫は礫床等の棺据え付け構造に由来する可能性が高い。しかし棺の被覆状況を推定する材料は乏しい。ごく簡略的な槨構造を想定することも一案ではあるが、推定される後円部上面の大がかりな改変を考慮すれば、現時点で結論を急ぐわけにはゆかない。（大久保）



- 1: 微細樹根と落葉細片
 - 2: 黒色腐植土 分解未了植物片含む
 - 3: 円礫・板石の間に堆積する濁黄褐色土
 - 4: 黄褐色土(推定盛土)
- *網掛け部は樹根

図3-4 調査区平・断面図

第5節 採集遺物

土器・埴輪類 (図3-5) 今回の調査で採集・出土した土器類は148点を数える。しかし長辺3cm未満の細片が大多数を占め、細かな分析は難しい。須恵器1点を含め古代ないし中世土器片5点、弥生土器は皆無で、大半は古墳時代前期に属す。それらはいずれも壺形土器片と判断でき、円筒埴輪の存在を推測する材料は伴わない。これは三谷石舟古墳の築造と石棺製作の時期を推測する重要な手がかりとなる。

壺類では器厚4～5mm程度の薄手の体部片(10～12)や小形の直口壺の可能性が高い頸部片(8・9)も見られるが、以下で詳述するように多くは中形の広口壺片の可能性が高い。その中でも器厚などからサイズには一定のバリエーションがありそうだ。中形広口壺は外傾して立ち上がる頸部から鈍く屈曲して口縁部が開く口頸部形態と復元される。野田院古墳や姫塚古墳に伴う壺形埴輪を想起させる形態である。丸底化した底部片とみられる部位片(16)も見いだせるが底部穿孔の有無は確認できていない。全体的に体部外面の広い範囲に縦ハケ調整が及び底部付近はナデで仕上げる(16)とみられる。肩部に粗い篋磨きを加えた個体もある(14)が、わずかだ。体部内面の中位以下は篋削り、肩部内面の広い範囲をその後指で強く押さえる。日用品の中形壺の形態と器面調整手法に通じ、仮器化が進展し変容した後出的な壺形埴輪とは明らかに様相を違えている。

なお船岡山古墳群資料の埴輪類胎土分析にあわせて三谷石舟古墳資料の3点(図3-5-4、14、15)もポイント法の胎土分析を行っている。詳細は(徳島文理大学文学部・高松市教育委員会2020)を参照されたい。

以下では掲載資料を個別に解説する。遺物番号の後ろの取り上げ番号は図3-4と対応する。墳頂北東崖面で検出した遺物については、出土位置のポイントを落としていない。

1 (NP20) はやや反りながら開く口縁部片。口縁端部は概ね矩形を呈するが内外両端を丸く収め、外方にごくわずかだけ突出するクセがある。小片のため口径の復元は困難。外面～端部は横ナデ、内面は横ハケ調整の後、横ナデを加える。中形壺の口縁部片である。端部直下で厚6mm、中位の最大厚7.5mm、破片下端厚6mmを測る。二重口縁形態の可能性を完全に排除できるわけではないが、他資料の所見と合わせ、単口縁広口壺とみる。2 (NP49) は中形広口壺口縁部。小片で口径の復元は困難だが9mm前後の器厚などから中形壺と推定する。口縁部は外反しつつ開く。おそらく外傾する頸部から反りを強めて連続する形態であろう。端部は上方に鈍く肥厚する傾向を見せつつ概ね丸く収める。内外面共に横ナデ仕上げ。内面は先立って横ハケ調整を加えた可能性がある。3 (NP39-1) は中形の広口壺頸部～口縁部片である。小片のため口径の復元は困難。外傾する頸部から緩やかに屈曲して口縁部は強く開く形態。端部は上方に鈍く摘み出して幅8mmほどの狭い面を持つ。端面下部の突出はない。外面横ナデ仕上げ。内面は器面が荒れ観察は困難。器厚は5.5～6mmを測る。4 (NP47、胎土分析資料) は中形広口壺口縁部片。ほぼ直線的に強く開く形態。端部は小さく面をなし概ね矩形となる。ただしかすかに下端側の突出が強い。内外面共に丁寧な横ナデで仕上げる。端部付近では器厚7mm前後となる。5 (NP40) は中形広口壺口縁部で口径約25cmに復元できる。頸部はおそらく外傾し、そこから鈍く屈折して開く口頸部形態を推測できる。内面が剥落し正確ではないが、口縁部で器厚10mm前後を測り分厚い。端部を上下に強く摘み出し幅2cmに近い広い凹面を形作る。三谷石舟古墳で確認できる広口壺では異例の形態である。頸部には9条/cmの斜ハケを施し、口縁部では強い横ナデで消す。内面は剥落し調整不明。6 (EP12) は中形広口壺頸部片。破片下端の厚さ12mmで上端は7mmと器厚の変異が大きい。形状から大きく厚さを増

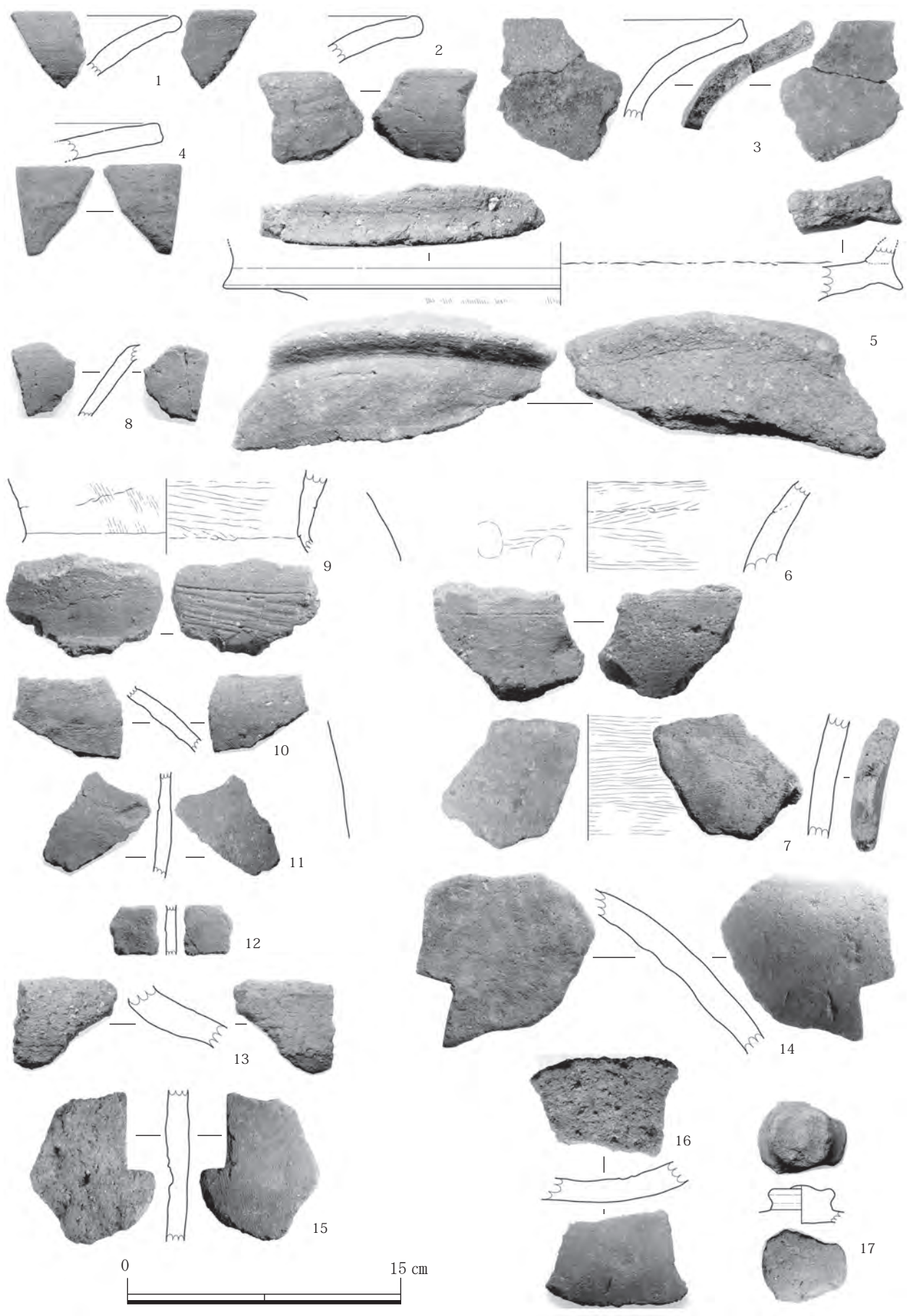


图3-5 土器・埴輪類実測図

した側を頸基部付近とみる。わずかに反りながら開く頸部形態が復元できる。内外面ともに横ナデ仕上げだが、両面とも局所的にやや強い条線が垣間見られるので、仕上げ前に横ハケ調整を施した可能性がある。7（墳頂北東崖面 P9-01）は中形広口壺頸部片。わずかに外反して開く頸部形態が復元できる。外面は丁寧な横ナデ仕上げで、内面は8～9条/cmの比較的細密な横ハケ調整で仕上げる。全体的に器厚は8mm前後を測る。8（EP38）は器種同定判が難しいが、おそらくやや広口で開き強い直口形態の小形壺の頸部片と推測する。器厚は下端の頸基部付近で6mm、破片の上端で4mmと薄い。外面は基部付近の15条/cm程度のごく細密な縦ハケ調整が残り、重ねて全体に横ナデ調整を加える。内面は横ナデで基部付近に3条の横走する太い条線が残る。ハケ調整痕跡の可能性はあるが、その場合外面のハケ原体とは明らかに異なっている。9（NP56）は中形の広口壺。頸基部の屈曲部～頸下部、もしくは肩上部～頸基部の屈曲部片である。小片のため判定は難しいが復元される傾きから前者の可能性が高いと推測する。その場合、破片下端に残る屈曲部は器厚5mmに対して頸部は厚8mmと厚い。頸部は外傾して立ち上がる。外面は頸部に9条/cm程度の細密な斜方向のハケ調整を施した後に横ナデ、内面の下半では4条/cmのごく粗く太筋の横ハケ調整を見る。頸部下半の復元径は11cmである。10（墳頂北東崖面 P7-2）は破片の一端にわずかに屈曲部が残る。壺の肩上部片であろう。外面はやや間隔を空けて13～15条/cmの細密な斜方向のハケ調整を施した後、肩線上端に幅1.5cm幅で横ナデを加える。内面は全体に指紋をよく留めた指押さえ痕が展開する。器厚は5～6mmとやや薄く、少し小振りな壺形土器かもしれない。11（墳頂北東崖面 P7-1）は外面に8～9条/cmのハケ調整を施し、内面全体に浅い指押さえ痕が広がる。内外の調整から壺の体部中位ないし肩部片と推測する。器厚は4～5.5cmとやや薄いので少し小振りな壺形土器かもしれない。12（NP37）は辺2cm未満の細片だが、最大厚4.5mmの薄造りなので掲げておく。外面には15条/cm内外のごく細密なハケ調整を加え、内面は指押さえによる鈍い凹凸を見る。器面調整から肩部片の可能性が高い。器種の判定は難しいが、器厚から中形壺よりも小形の壺類の可能性はある。13（NP28）は壺肩線上端部片。一端に頸部に向かう屈曲部分が残る。器厚11～13mmと分厚い。小片のため復元径は提示し難いが、器厚と相俟ってやや大形の壺形土器と推定する。外面は横ナデ仕上げでごく一部に穿孔するハケ調整を反映すると見られる斜方向の条線をみる。内面はひどく荒れるがおそらくナデ仕上げであろう。14（墳頂北東崖面 P8-1、胎土分析資料）は壺の肩部片で、頸基部までは続かない。器面が荒れて明確ではないが外面上端に横ナデによるわずかな擦痕が残り、また縦方向の比較的緻密な篋磨き痕もみる。内面全体に指押さえ痕がある。器厚は最大11mmに達する。径の復元は困難だが中形ないし大形壺と推定する。15（NP43、胎土分析資料）は中形壺体部片。器厚8～9mmを測り、外面には10～11条/cmの細密な縦ハケを施し、内面は縦ないし斜方向の篋削りを加える。破片の形状と内外面の調整から体部片と推測する。なお外面ではハケ調整に斜交する幅3mmの浅い凹線一条が観察でき、これを体部上半に加えた篋磨きの末端と見なしてよければ、体部の中位付近に復元できるだろう。16（EP23）は外面ナデ仕上げ、内面は複数方向に施した篋削りが重なり、器厚は8mm前後を測る。全体に丸みが強い破片で内外の調整に留意すれば中形壺の底部付近の可能性が高く、完全に丸底化した形態が復元される。17（NP61）は径2cm内外のやや大ぶりのボタン状摘みを付す須恵器坏蓋片。焼成はやや甘く淡灰色～淡青灰色を呈する。概ね奈良時代～平安時代初頭に位置づけられるだろう。その他、図示していないが中世土器塚の口縁部細片2点、土鍋細片1点がある。

壺類の素地調整パターン（写真図版5）について簡単に触れておく。総じて細粒砂以下の細粒物

を稠密に含む。高松平野周辺の弥生時代後期土器の大勢的な傾向を引きつぐもので、船岡山1号墳埴輪や鶴尾神社4号墳など石清尾山塊の前期古墳の埴輪にも通じる。もっとも埴輪類では中粒砂以上の粗粒物がやや多い。また配合鉱物種では角閃石細粒が極端に多い一群(図3-5-14など)と一定量の角閃石を含むが、それ以上に石英など半透明の粗粒物が目立つ一群とがある(同図6・10・16など)。前者は弥生時代

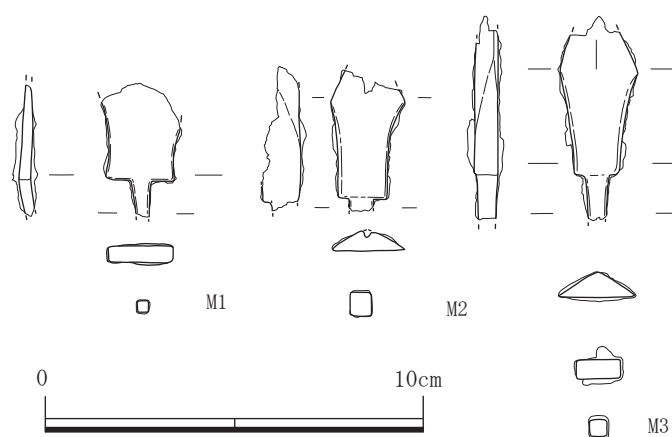


図3-6 鉄鏃実測図

後期の香東川様式土器の主流タイプと共通し、石清尾山古墳群の埴輪でもこのタイプが多数派となる。しかし三谷石舟古墳埴輪ではこのタイプの素地は少数派である。(大久保)

鉄鏃(図3-6) 北調査区において、表土除去中に鉄鏃が3点出土した。鉄鏃は全て円礫帯集中範囲より、円礫に混ざった状態で出土している。下記の遺物番号の後ろに記した数値は図3-4に対応する。詳細は後述するが、鉄鏃は全て古墳の副葬品と考えられる型式の資料であり、石棺周囲に広がる円礫帯は、埋葬施設起源で二次的な攪乱を受けた状態であると推測できる。

M1~M3は、鉄鏃。いずれも先刃式鏃のうち、定角A式に分類できる。刃部の欠損が顕著なため、細分は難しいが、M3の資料では刃部がやや内弯する曲線を描くと考えられるため、3型式に相当すると考えられる(川畑2009)。M1(NI2)は刃部と茎部先端が欠損。M2~3に比べて比較的薄く扁平な造りである。茎関には段を有さず、全体が板状に扁平な形態。鑿切りによって成形した可能性有。M2(NI1)は刃部先端と茎部先端がそれぞれ欠損。重厚な造りで立体感に富む。刃部断面は三角形を呈し、刃部鏃は欠損しているが本来は明瞭に有した可能性が高い。茎関は明瞭に段を有しており、刃部と茎部を別造りにしたか、鍛打により形態を造り出した可能性が考えられる。M3(NI3)は3点の中で最も遺存状態が良いが、刃部先端と茎部先端を欠損。刃部は全体に重厚な造り。刃部は残存部分では直線的に伸びる傾向にあるが、先端で丸く弯曲する可能性が捨てきれない。刃部には鏃を有すが、範囲は鏃着によって不明瞭。茎関にはM2ほど明瞭ではないが段を有す。M1~3いずれも茎部に着柄の痕跡は認められない。これらの編年的な位置づけについては、三谷石舟古墳の築造年代を検討する上で重要であるため、第6章で詳述する。(高上)

第6節 石棺の形態

立体感に富み精緻に造形された造付け石枕、幅広い棺底平坦面を作り出した横断面形態、左右側辺の一条突帯、足辺に取りつけた方形板状の突起、以上が本石棺の主たる特徴である。長年の間地表に露出し風雨等の影響で損耗が進んでいる。足辺が浅く地中に埋没した現状では棺底付近の詳細な観察は難しいが、以下観察所見を述べる。

法量とプロポーション

突起部を含めた棺身の全長297cmで、突起部を除いた本体長(主軸長)は276cmである。頭・足辺はほとんど直線的だが、両側辺はゆるく彎曲し中膨らみ様をなす。頭辺から約75cm、つまり全長の1/4付近-ちょうど造付け石枕のあたり-で最も膨らみ、幅79cmに達する。一方頭辺の幅は

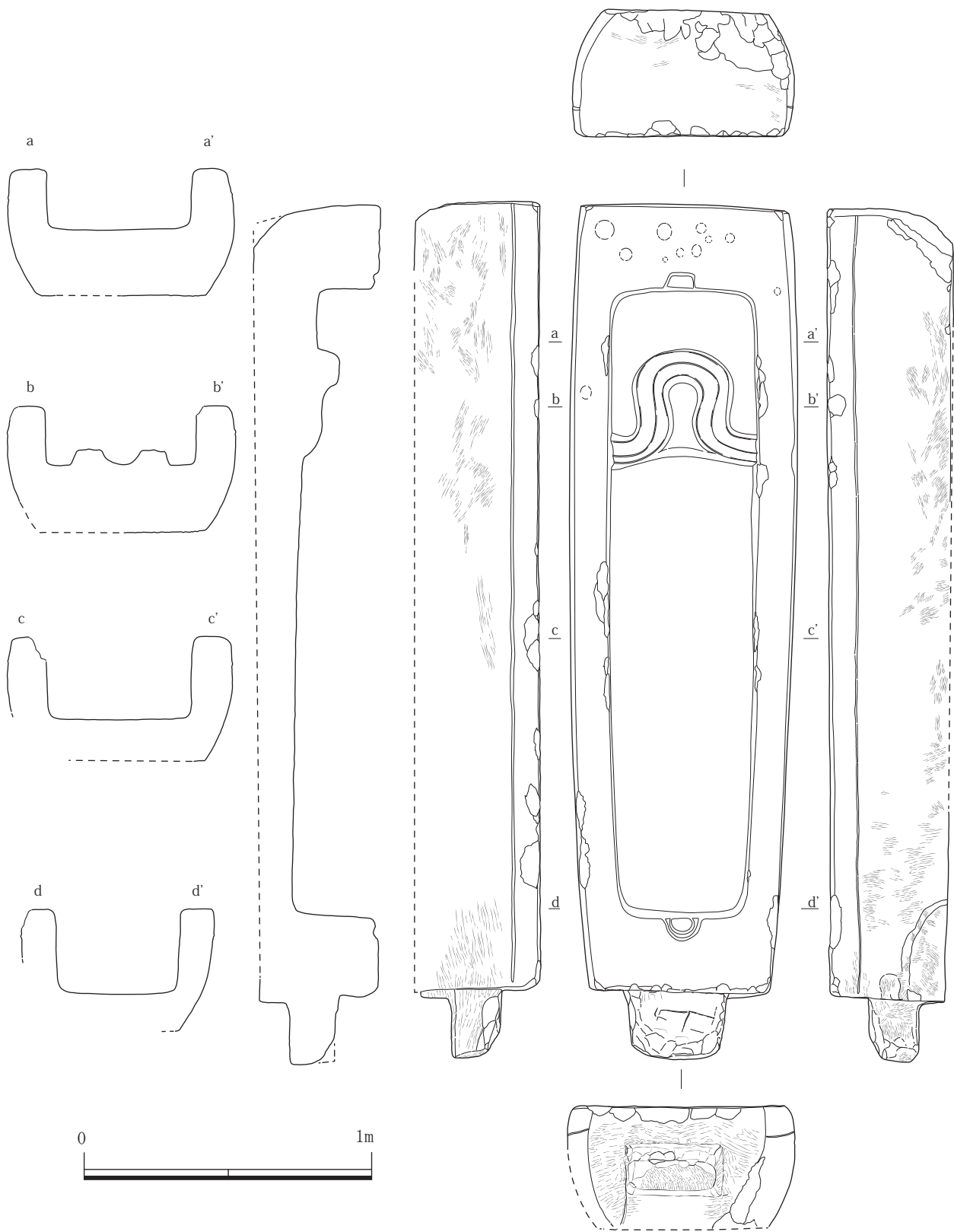


图 3-7 三谷石舟古墳石棺実測図

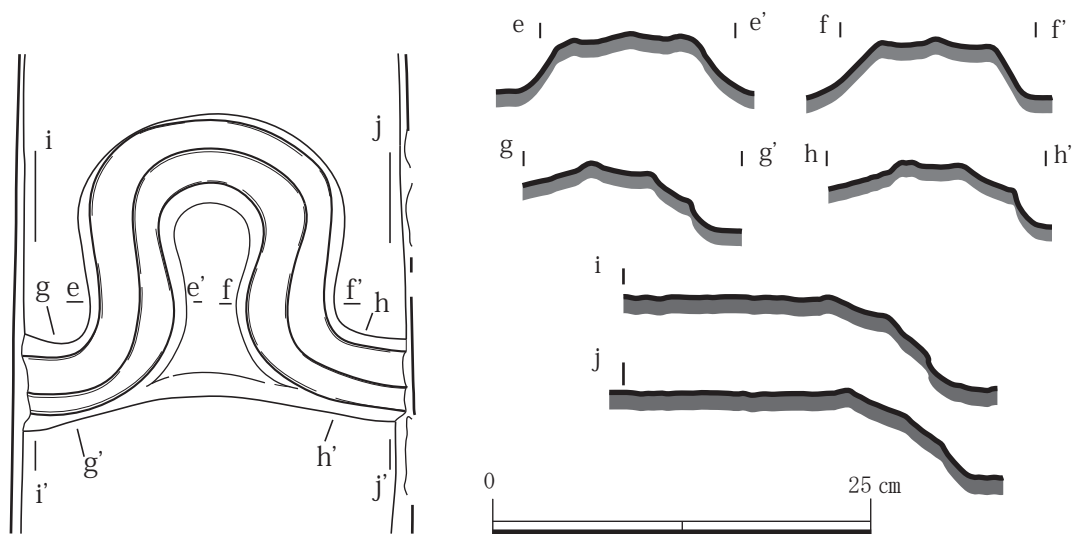


図3-8 石棺枕形状詳細図

72 cm、足辺はさらに細く幅 63 cm で最大幅部より約 9 cm 狭くなる。こうした棺身平面形の中膨らみ傾向は前期の刳抜式石棺でまゝ観察できるが、本石棺は浅野小学校所在石棺と共にそれがとくに顕著である。

なお棺身上面では頭辺中央に刳り込み部に接して台形様の浅い刳り込み部が、足辺の対応位置にも浅い半環状の凹帯をめぐらす。全体に摩耗が進んでいる。機能は不明だが特に後世の造作を疑う理由はない。前者は 11 cm × 6 cm で深さ 1.5 cm 内外、周囲の損耗で不明確だが底面中央がやや盛り上がる。足辺と同じような凹帯を矩形にめぐらしたものかもしれない。後者は 14 cm × 8 cm で、凹帯の幅 3 cm 内外で深さは 1.5 cm 程度である（写真図版 6 右下）。

棺身高は頭辺で 44 cm だが足辺では約 40 cm とわずかに低い。底面幅は頭辺付近で約 53 cm と上面幅の 8 割近くにも及ぶ。左右側縁は棺底から内湾気味に開き立ち上がる。底面からおよそ 27 cm 前後で最大幅に達し、そこからやや内湾気味にすぼまり棺身上面に至る。身横断面は半円形ではなく、上端は直径より高い位置で切り取り、これと並行して円弧を大きく除去した形となる。

突起は足辺のほぼ中央に取り付く。基部幅 35 cm、長さ 24 cm で基部の厚みは約 18 cm とやや薄い方形板様を呈する。先端はゆるく弧を描く。石棺開掘時の損傷が上面に多く残り先端部上面を多少欠損する。突起下面から左辺の延長でそのまま足辺下端まで 2 cm 内外の段差が続く。右辺側には続かないが、突起作出時の痕跡とみられる。おそらく一旦は下端まで続く高い方柱状の突起を小口部に残し、最終的にその下半を刳り取る形で突起の現形を完成させたのであろう。

刳り込み部の平面形は概ね外形に相似する。短辺の両端はいっそう緩くカーブして側辺に連続する。この作りと連続して頭足両短辺はごくわずかだが丸みを帯びる。刳り込みの内壁はほぼ直線的でごくわずかに外傾し、断面形状は概ね箱形をなす。床面もほぼ平坦である。

外面装飾

左右側辺には棺上面から 7 ~ 10 cm 下がった位置に各 1 条の細く低い突帯を設ける。中位の最大

幅部より 10 cm内外は高い位置である。突帯は頭・足辺には廻り込まず、足辺側では短辺の少し手前で終息する。また必ずしも直線的に配されず不規則に撓み、稚拙な観がある（写真図版 6 上）。外面の風化損耗でわかりにくくなっているが、現状では幅 1.3～1.7 cm程度で高さはせいぜい 0.5 cm内外に過ぎず、他石棺の外表突帯に比べかなり繊細である。断面形は概ね蒲鉾形を呈するが、風化により現状では必ずしも均一ではない。

断面形状

削り込み部の長さは主軸上で 219 cmを測る。石枕付近で最も幅が広く 52 cmで、頭辺でもほとんど差はない。対して足辺は狭く幅は 43 cmにとどまる。石枕の作出と関係して床面は二段構成となる。頭辺から石枕部（頭辺より 58 cm）までの削り込みの深さは約 21 cmで、約 5 cmの緩い段差を経て中央部付近で深 29 cm、足辺では深さ 30 cmに達する。

削り込みのサイズと関連して棺身各部の厚さは頭辺（主軸付近）29 cm、足辺（主軸付近）28 cmとなる。側辺では頭・足辺よりもかなり薄く右辺側で頭辺付近 15 cm、中央部 14 cm、足辺付近 11.5 cmとなる。左辺側では各々 13 cm、13 cm、12 cmを測る。棺底厚は頭辺寄りの上段で 22 cm前後、下段では中央部では 13 cmとなる。足辺付近はおそらく 11 cm程度となろう。

石枕

石枕は仰臥伸展させて棺に納めた遺骸の姿勢、とりわけ顔面の向きを保持する装置である。造付け石枕の場合、基本的に棺床面を二段に設え、高位部にこれを作り出す。頭部の向きを保持する隆帯を床面の段差に接するようにΩ形にめぐらす。もっとも一部では尾部を省略した馬蹄形の隆帯もある。隆帯の内側は遺骸の後頭部にあわせて隆帯外周床面よりも若干、楕円形ないし円形に皿状に浅く凹ませる。安置した遺骸は後頭部を皿状の凹みに載せ、頸背面を段部にもたせかけ、両肩は段下に収まる形となろう。顔面が斜め前を向く姿勢を保つことになる。石枕の装飾はもっぱら隆帯部に施される。その場合、内外二帯を隆帯の基本構成とし、装飾の繁縷化はとくに外帯に現れる傾向が強い。

本石棺では、とくに隆帯を立体的に作り出すことと、多くの石枕隆帯では平板な構図となる隆帯の装飾が、シンプルとはいえ三次元的な構成を巧妙に表現していることが目を惹く（写真図版 6 中央右）。あえて云えば、快天山古墳石棺（1～3号棺）や一見過剰なまでの繁縷な装飾を凝らす岩崎山 4号墳石棺では表現様式が画像石様に硬い。これらに比べ磨臼山古墳石棺のそれはまだ立体的だが本石棺には及ばない。

高位部床面の縁辺から 19 cm距たった位置から最大で高さ 7.5 cmに達する隆帯を立ち上げる。隆帯外側面は約 70°で立ち上がるが、後頭部を載せる内側面はこれより緩やかに凹む。棺主軸方向の長さは 40 cm、隆帯円形部の最大幅は 35 cm、Ω形に展開する左右の尾部は床面一杯に広がり幅 50 cmに及ぶ。隆帯の上面は内外二本の同巧の凹帯をなし、凹帯縁辺はやや強調気味に突出させ、都合 3本の突帯が二条の凹帯を縁取るように見える。隆帯の尾部は床面高位部に収まらず、高さを減らしつつ床面段差に乗り出して左右に延び、段部の勾配に沿い上面の凹帯も傾斜する。（大久保）

第 7 節 石棺の製作技法

全般的な風化損耗の進展により本石棺の製作痕跡を留める部位は限られている。最も風雨の作用を強く蒙る棺上面は損耗が著しく上面縁辺は全体として摩滅している。左右側辺と頭辺小口も同様

であるが、地表の堆積物に覆われた側辺小口と突起部及びその周辺では部分的に製作痕跡を観察することができる。また風雨の作用を蒙りにくかった外底面では製作痕跡をよく残す。

外底面には径2～4 cm台の概ね矩形を呈する粗い敲打痕が重複して連続する（写真図版4右下）。磨臼山石棺の棺身下半に広く残る製作痕に通じる。磨臼山古墳石棺はこうした敲打痕が頭・足辺を含めて棺身下半部に及ぶが、本石棺は仕上げ整形で棺側面の敲打痕を完全に消す。なお製作途上で廃棄された石船石棺（棺身）下半部にも同様の敲打痕が明瞭に観察できる。足辺小口と突起部及び棺側の一部には幅2 cm以下の幅狭い鑿痕がかすかに残る（写真図版6中央左）。足辺小口面では鑿痕は概ね水平方向に走る。突起部の両側面も同様であるが、製作痕が比較的明瞭に残る突起部先端は縦方向に走る鑿痕が整然と並ぶ。棺側辺でも同様の鑿痕は局所的に確認できるが、観察部位がきわめて限られ工具操作の規則性は定かではない。その中で注目できるのは右側辺の足辺際に残る15～17 cm×35 cmほどの目につく抉れ部分である。使用岩塊の形状もしくは製作途上で大きく岩片が剥落した部分らしい。抉れの修正を試みた縦位ないし斜位方向の鑿痕がよく残る。（写真図版6中央左）。その他は観察が難しい。強いて云えば棺側中位では水平方向の鑿痕が残る部分が多く、下底寄りでは縦ないし斜位に走る痕跡が目立つ。突帯を含めた側辺上部は損耗がいっそう著しく、こうした工具の操作痕跡をほぼ完全に失っている。浅野小学校所在石棺では突帯側縁に慎重に沿わせ、突帯を際立たせる鑿痕が残るが、本石棺では明らかではない。割り込み部内面はいっそう製作痕跡を観察できない。石枕隆帯の外側基部の形状と、曲面をなす棺内壁・床面の接続部には明瞭な作り分けが看取され興味深い。（大久保）

第8節 石棺の劣化状況

表面観察では直ちに棺の破断に至るような亀裂は観察できない。石船石棺や浅野小学校所在石棺で危機的に進捗している棺材表皮の目立った剥落も本石棺では幸い進行していない。

しかし露天にあって風雨の影響をとくに強く蒙りやすい石棺上面及び側辺上半では風化損耗が進行している。とくに上面縁辺が全般的に溶けたように摩耗し、また頭辺寄りに雨滴による大小のスリバチ状凹みが多く目につく。また右側辺では一見、地衣類の繁茂を思わせる白緑色の斑文が大小に重なりあって広がる。しかしこの部分を仔細に観察すると斑文は表面を被覆するのではなく、逆に侵蝕するように石棺材の表面を細かく粉状化しているように見える（写真図版6左下）。この結果、側辺突帯や棺体整形時の微細な製作痕跡を劣化させているので看過しがたい。

これらに比べれば物理的な損傷は多くはない。側辺突起部の上面、頭辺下部には石棺開掘時についた大小の打撃痕は集中し、上面縁辺にも打撃痕が見いだせるが摩耗は著しく近年の所産ではない。

本石棺は墳丘上にあるが本来の埋置状態を反映していない。かえって露天で不慮の物理的な損傷の懸念が常時つきまとうことと、確実に進行する風化損耗に対して最大限の注意を要する。（大久保）

《参考文献》

川畑純 2009 「前・中期古墳副葬品の変遷とその意義」『史林』92巻2号 京都大学
徳島文理大学文学部・高松市教育委員会 2020 『船岡山古墳群Ⅲ（総括編）』

第4章 石船石棺

第1節 調査の方法

石船石棺は、現在石船天満宮境内の一隅に設置される。国分寺町教育委員会時代から、石棺の保全のため覆い屋や玉垣等の設置が段階的に実施されていたが、今後の保存対策の検討のために現況の記録が必要と判断して、石船天満宮内の簡易測量を行った（図4-1）。また、調査開始前の石棺の観察では、表面に埃などが溜まっていたが、他の石棺に比べて苔などの付着は少なかった。一方、石棺外面では層状の剥離が著しく、毀損の恐れが大きいため、表面清掃は柔らかなスポンジで埃を払うのみとし、表面を傷つけないよう注意して実施した。

表面清掃後、形状と現状を記録するために、フォトスキャンを用いた写真測量を行った。写真測量の方法は、第3章と同様である。

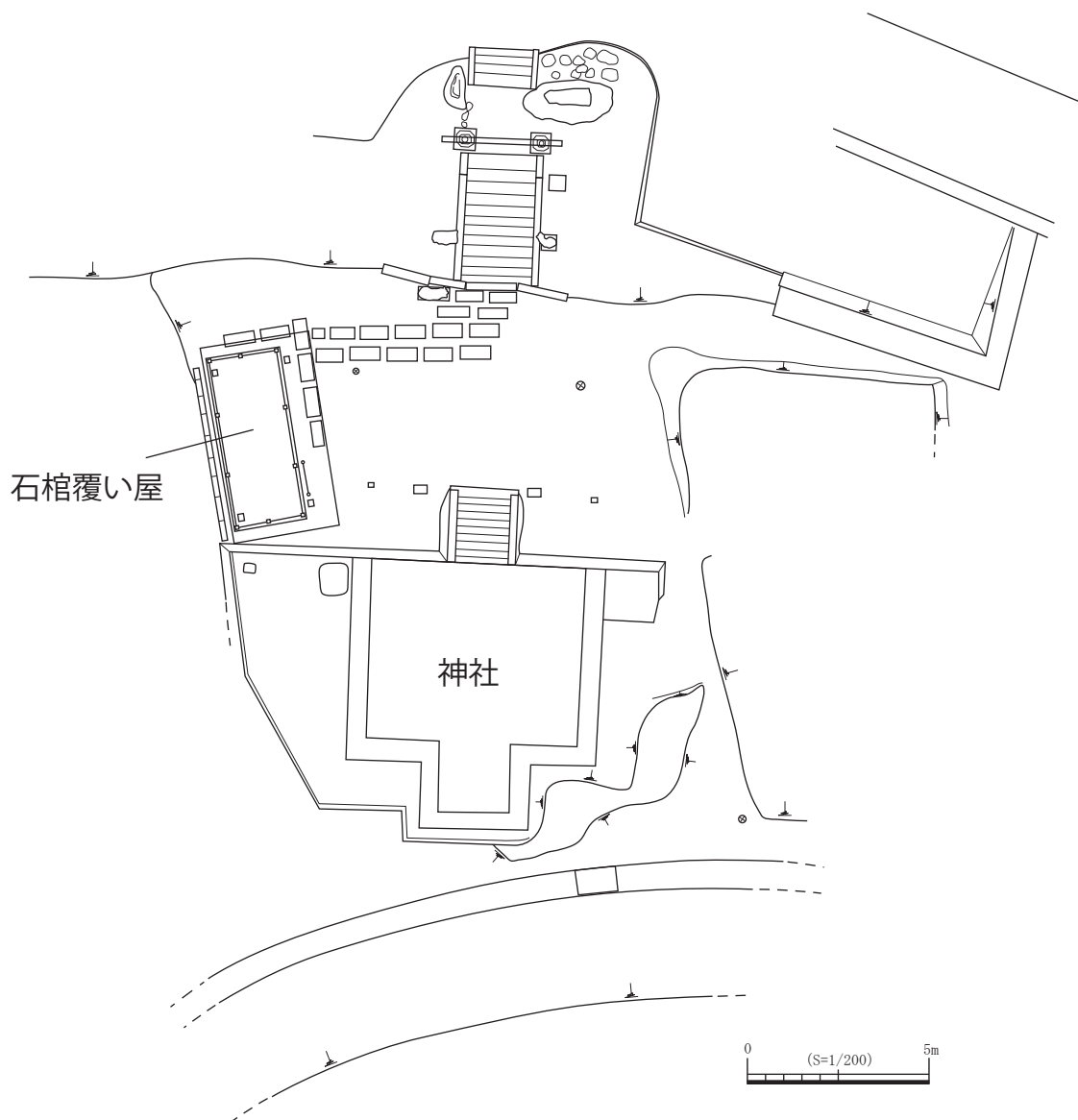


図4-1 石船天満宮境内平面測量図

第2節 石棺の形態

プロポーション

対象石棺は刳抜式石棺の身である。蓋の所在は明らかでない。石枕の位置を基準に頭部、足部と呼称する。全体の平面形は頭・足部共に縄掛突起を有す。縄掛突起は頭部側がやや小さく、足側が大きい。端部がやや大きく、付け根に向かってくびれて細くなる。右手長側壁に大きなワレが認められる。枕部は略方形台が残っているが、製作途中で何等かの理由で放棄されたものと考えられる。製作のかなり最終段階に近い未製品であるとの理解（蔵本 2005）が示されている。全体の平面形としては頭部側がやや幅が広く、足部側に向かって幅が漸減する。

石枕

枕相当部は略方形に残されており、他の事例を参照してもこれが完成形とは考え難いため、製作途中であるとする理解を支持したい。略方形台の基部周辺にはやや大振りな叩打痕が集中しており、枕の概形を造り出すための調整と考えられる。

枕の整形途中段階で方形台に仮成形されたことは重要である。類例を見る限り完成した石枕はΩ字形を基本とする。製作の最終工程で様々な装飾がなされるが、Ω形の最終形をデザインするにあたり円形でなく方形を基準として（いわばキャンバスとして）製作がなされたのである。文様の割付等の技法を検討する上で基礎となる情報であろう。

外面装飾

他の事例にみられる、突帯による装飾はみられない。調整とも関係するが、外面に顕著に粗い叩打痕を残すことから、外面の最終工程が未了であった可能性も考えられる。

断面形状

断面については、下半の表面で剥離が著しく、石棺を直接計測しての図化を断念した。このため、石棺上部で部分的に断面図を作成した。なお、（蔵本 2005）には4箇所断面図が掲載されているため、断面形状はこちらを参照して記述する。

断面の特徴として、割り込みが他の石棺に比べて浅く、したがって下半が厚いことがうかがえる。特に頭部では割り込みが比較的深い、足部では浅くなる。頭部付近の割り込みでは、後述する1次割り込みと2次割り込みに対応する凹凸が観察できる。

法量

外形：全長 267 cm（最大、突起含む）、幅① 92 cm（枕部）、幅② 80 cm（足部）

頭部側縄掛突起 長さ 19 cm、幅 40 cm（最大） 足部側縄掛突起 長さ 30 cm、幅 52 cm（最大）

内法：全長 242 cm、幅① 41 cm（枕部）、幅② 32 cm（足部）

枕：最大長 34 cm、最大幅 29 cm

なお、枕の頂部を起点とし、足部までの最大長は 205 cm である。副葬品の埋納に十分な広さを持つことがうかがえる。

第3節 製作技法

第1項 石棺製作技法

製作途上の可能性が高いため、他の事例とは表面に異なる工程の痕跡が残っている可能性に留意する必要がある。調整として顕著なのは、内外面ともに比較的大振りな叩打痕を残す点である。

続いて、石枕周辺の内面調整を詳細に見てみたい。内側面を観察すると、加工による傾斜の変化

が水平方向に連続する箇所を見出すことができる。この傾斜変化ラインは、概ね石枕の天端高さとも一致する。このため、石棺内部の製作工程として、①まず大きく枕の上面ほどの深さまで割り込みを行う。②①が足部まで完了した段階で、石枕予定部分を方形台形に残して、内面をさらに割り込んでいく。この工程差に伴う凹凸が石棺内面に残されているのである。①を1次割り込み、②を2次割り込みと呼称する。2次割り込みは、外面に残る叩打痕より一回り小さな叩打痕が残るため、異なる工具若しくは異なる工法（道具の使い方含む）によって実施されたことが推定できる。2次割り込みは頭部周辺から中位までしか観察できない。断面形で確認したように、足部の割り込みが浅いのは、この2次割り込みが及ばなかったためであろう。すなわち、本例は二次割り込みの途中で製作が中断したと考えられる。

第4節 破損状況の傾向

本例では、まず最大の破損として、石棺右手側側面の欠損が挙げられる。どの段階での破損かは不明であるが、石棺としての機能（遺骸の密閉）に致命的な欠損であることを考えると、製作を途中で停止した要因である可能性も高い。本例では、石棺の長軸方向に沿った長いヒビが確認できる。おそらく石材の節理に伴う山傷と考えられるこうしたヒビと平行した方向で上記の欠損も生じており、山傷による製作途上のワレである可能性が高い。

合わせて、表面の劣化は特に石棺外面下半において顕著である。こうした状況は後述する浅野小学校石棺と同様の劣化状況といえる。この劣化は、厚さ1mm以下の層状に表面が剥離するものであり、石棺表面の風化の進行に伴い発生している。特に現在進行形の破損であり、石棺下部には剥がれ落ちた剥片が多数落下している。

《参考文献》

蔵本晋司 2005 「鷺ノ山石棺からみた讃岐の前期古墳と対外交渉」『さぬき国分寺町誌』国分寺町

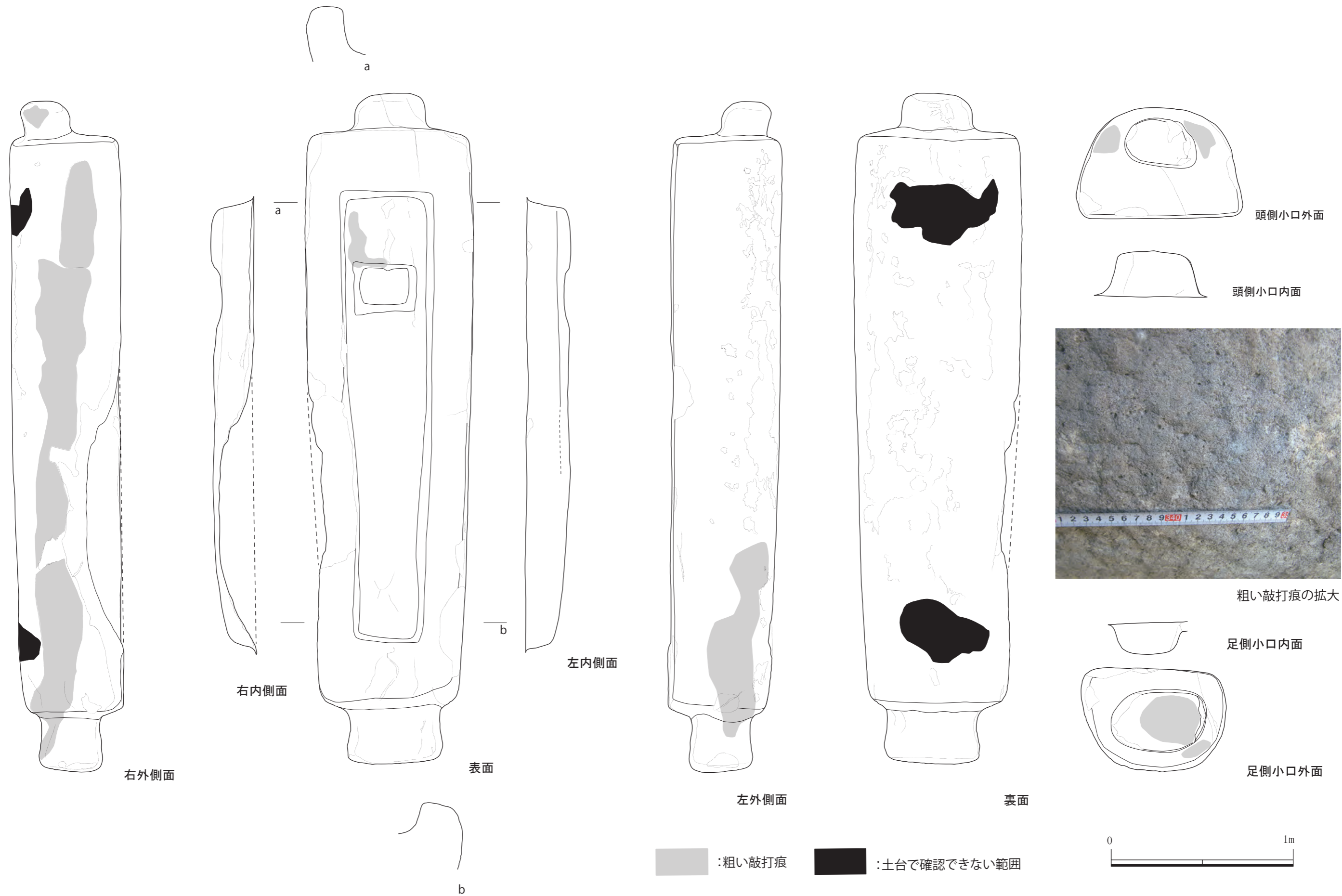


図4-2 石船石棺実測図

第5章 浅野小学校所在石棺

第1節 調査の方法

浅野小学校石棺は、現在浅野小学校南側校庭の一隅に設置される。調査開始前の観察では、表面に埃などがやや溜まっている点、苔類と考えられる植物質の物質が表面に付着していることが判明しており、詳細な観察を行うに当たって表面清掃を行うこととした。表面清掃は水と柔らかなスポンジを用いて行い、表面を傷つけないよう注意して実施した。

表面清掃後、形状と現状を記録するために、フォトスキャンを用いた写真測量を行った。写真測量の方法は、第3章と同様である。

第2節 石棺の形態

プロポーションと二次転用に伴う破損

対象石棺は刳拔式石棺の身である。蓋の所在は明らかでない。石枕の位置を基準に頭部、足部と呼称する。全体の平面形は頭部付近がやや幅広の方形で、隅角はやや丸みを帯びた隅丸方形と言える。後述する外面装飾の突帯がこの隅丸形に沿って観察できるため、本来の形状も隅丸であったことが判明した。また、内法の形状をみると、頭部側が幅広で、足部に向かって幅を減じることが見て取れる。頭部、足部ともに小口壁は打ち欠かされている。平面形をより詳細にみると、石枕を中心軸として、左右の対称性が低い点が指摘できる。特に足部に行くにつれて左右が非対称となるが、外面の突帯等の遺存状況が良好であることから、破損によるものではなく、製作時の形状であることがうかがえる。原材料である石材の形状に起因したものと考えておきたい。

石枕

従来、石枕は全て打ち欠かれて欠損しており、詳細不明と考えられてきたが、今回詳細に観察を行ったところ、本来の枕形状の突部に対応する起伏が遺存することが明らかになった（写真図版12左下）。この遺存部の微細な突起を手がかりに図示を行った。すると、平面形は「Ω」字状を呈していたことが推測できた。

外面装飾

石棺左右の長側壁外面に、上下2段の突帯が彫り出される。突帯の幅は2.5 cm程度、突出は0.5～0.8 cm程度の起伏で成形される。石棺上面と平行に直線的に彫り出される。後述する断面形状の左右非対称は、下段の突帯よりも下部で確認されており、突帯よりも上では比較的対称性が高い。このため、下段の突帯を境に上部は精緻に製作し、下半は整形の省略がなされた可能性が高い。

断面形状

側壁部と底面間に形成される屈曲は明瞭で直角に近い。この屈曲部には細かな調整が集中することから、意図的に最終調整段階で明確な屈曲が作り出されたことが想定できる。また、石棺の下半では、右手側が非常に薄くなっており、断面円筒形を呈さない。上記の平面形の左右非対称性とあいまって、断面形でも非対称が生じていることがうかがえる。製作中に欠損した可能性や製作時の石材の形状に規定された可能性が考えられるが、内面調整の精緻さに比して、少なくとも石棺設置時には見えなくなる下半の形状にあまり留意しなかったことが想定できる。

法量

外形：全長 219 cm（欠損部、最大）、幅① 73 cm（枕部）、幅② 65 cm（足部）

内法：全長 173 cm、幅① 42 cm（枕部）、幅② 29 cm（足部）

枕：最大長 32 cm、最大幅 42 cm

なお、枕の頂部を起点とし、足部までの最大長は 163 cm であり、伸展葬が想定される被葬者の身長最大の値がこの程度と小柄であることがうかがえる。副葬品の埋納スペース等を勘案すると、さらに遺体のサイズは小さくなる可能性が高い。

第 3 節 製作技法

第 1 項 石棺製作技法

石棺の表面観察によって確認できるのは、製作の最終工程において残された痕跡である。工具などが石棺表面を削った際に残る痕跡を分析することによって認識することができる。本例においては、一部を打ち欠いて樋に転用される、二次的に移動される、屋外に露出する等本日にいたるまでの経緯において自然に摩耗し、或いは人為的に欠損してきた。今回確認できた製作技法はその一部に過ぎないが、観察所見を整理すると以下のとおりである。

調整が確認できたのは、石棺内部の長側壁内面及び底面である。3～5 cm 程度の細い線状の窪みによって認識できるそれは、主に上記範囲のうちでも屈曲部付近に集中する。既に述べたとおり内面の屈曲は明確な折れを持っており、この最終形状の仕上げに伴う技法の可能性が高い。想定されるのは、明確な刃部を持つ工具により繰り返し打ち欠く行為である。調整の方向は概ね平行しており、重複しても交錯することはない。同一方向からの繰り返しによって石棺表面に残った痕跡と考えておきたい。当該期の出土資料から推定される工具としては鉄斧、鑿等が考えられるが、器種・法量などをこれ以上検討することは難しい。仕上げ工程で用いられた工具であることを推察しておくに留める。

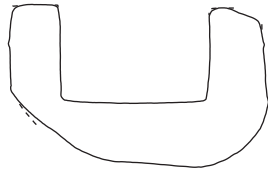
第 2 項 転用時の痕跡

石棺の両小口部及び石枕は意図的に破壊され、水樋に転用されていた。石棺の破壊がいつなされたのかは明確でないが、少なくとも近世以前であることが判明している。

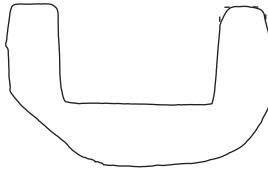
さて、小口部の破壊方法と、枕部の破壊方法は、表面観察による限りやや異なっている。小口部では、比較的粗い叩打痕が認められ（写真図版 12 右上）、表面の平滑化は認められない。一方で、石枕については、表面が比較的平滑に凹凸少なく仕上げられている。これはおそらく転用先の用途として樋が事前に想定されており、側面の凹凸は通水にあまり影響しないが、枕部すなわち樋の底面に相当する部位では、凹凸に草や葉などが引っかかることにより、通水に悪影響を与える可能性が考慮されたものと考えられる。転用の用途によって、加工の方法・程度が異なっていることが指摘できる。

第 4 節 石棺の劣化状況

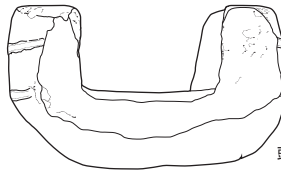
本例では、まず最大の破損として、水樋に転用された際に打ち欠かれた両小口と石枕の欠損が挙げられる。これは不可逆的な破損であり、もはや旧状を復することは不可能である。合わせて、表面の劣化は特に石棺外面下半において顕著である。この劣化は、厚さ 1 mm 以下の層状に表面が剥離するものであり、石棺表面の風化の進行に伴い発生している。特に現在進行形の破損であり、石棺下部には剥がれ落ちた剥片が多数落下している。草木の芽や蔓が隙間に入り込み、さらに剥離を進めている状況も確認できた。



a-a' 断面



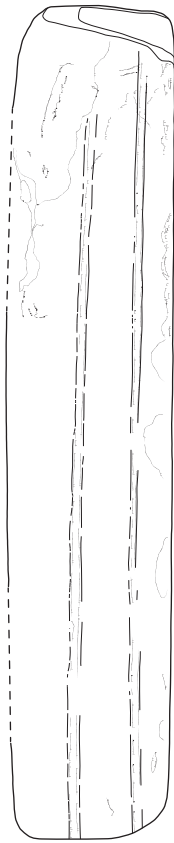
b-b' 断面



頭側小口



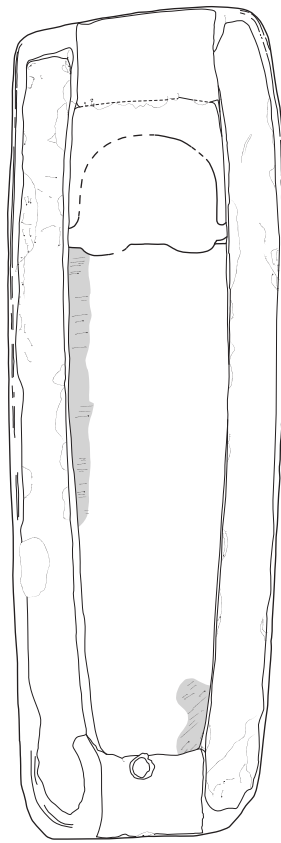
: 細い線状の調整の拡大



右外側面



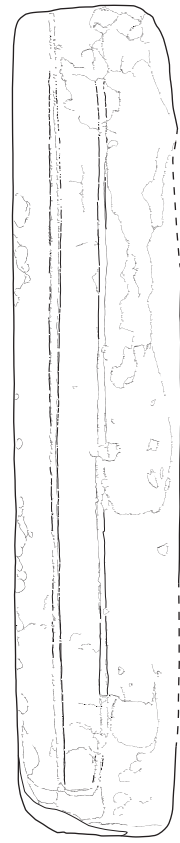
右内側面



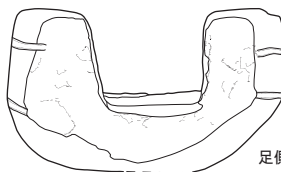
平面



左内側面



左外側面



足側小口

: 細い線状の調整



図5-1 浅野小学校石棺実測図

第6章 まとめ

第1節 石棺の劣化状況の傾向

<石棺本体の劣化状況>

本稿で対象とした3基の石棺について、表面観察により劣化状況をそれぞれ確認した。いずれも製作から長期が経過しており、二次的な移動や転用により生じた欠損等の形状の変更は不可逆的な変化として旧状に復すことはできない。加えて、近年になって徐々に進行するタイプの毀損を確認することができた。特に顕著なのは石船石棺・浅野小学校所在石棺であるが、石棺表面の膜状・層状の剥離の進行がこれにあたる。部位としては外面下半に集中する点でも共通性がある。石棺表面には凹凸の小さな装飾や、製作過程を示す調整の痕跡が残っており、その詳細な観察で新たな所見が提示できることは本書で指摘してきたところである。表面の層状の剥離は人為的な打ち欠き等に比べて毀損の規模は相対的に小さいものの、失われる情報という点では憂慮すべき事態である事は論を待たない。

<石棺の置かれた環境>

三谷石舟古墳では二次的に移動したことが想定されるが、石棺が墳丘上に（一部地中に）設置される。覆い屋等は無く、露出する。周辺には樹木が多く生育し、林の中といった環境に近い。浅野小学校石棺は学校の花壇に設置してあり、石を噛ませて地面からやや浮かせて設置している。覆い屋は無く、周囲には高木がないため露天に近い。石船石棺は神社境内に石を噛ませて浮かせて設置しており、覆い屋が設けられている。

このように、それぞれの石棺は置かれた周辺環境に様々な差異がある。ここで重要なのは、最も保存対策が多くなされている石船石棺において、破損の進行が顕著なことである。一方で、何も対策を講じていない三谷石舟古墳石棺において遺存状況が最も良好である。石棺そのものの材質・来歴に由来する可能性もあるが、周辺環境も含めて石棺を適切に保存するために必要な条件について、正式に調査する必要がある。単純に屋根を掛けることで保存対策が達成されるのではないことは明白である。

<小結>

本稿では石棺の現況把握と、石棺そのものが持つ考古学的に重要な情報がどこに、どのような状態で保持されており、またそれがどのような毀損の危機に直面しているのかを整理してきた。一方で、周辺環境については自然科学的なアプローチで毀損要因の検討を別途すすめている。本書の冒頭で整理したように、これら一連の調査は史跡石清尾山古墳群における本質的価値の構成要素である刳抜式石棺の確実な保存方法の検討を嚆矢として立ち上げた事業である。調査が整備として結実するために、調査成果の整理と検討、具体的な事業化が今後必要である（高上）。

第2節 三谷石舟古墳出土鉄鏃の編年的位置

第1項 三谷石舟古墳出土鉄鏃の型式学的特徴

古墳時代前期の副葬鏃については厚い研究史があるが、近年体系的な編年案が提示され、一定の支持を得ている（川畑 2009）。本書ではまずこれに準じて三谷石舟古墳出土鉄鏃の編年的位置を確認しておこう。

対象資料の型式分類は、先刃式鏃のうち定角 A 式に分類できる。刃部形態がある程度判明する M

3では刃部が直線的に伸びる傾向が認められるため、3型式に分類するのが妥当であると判断する。

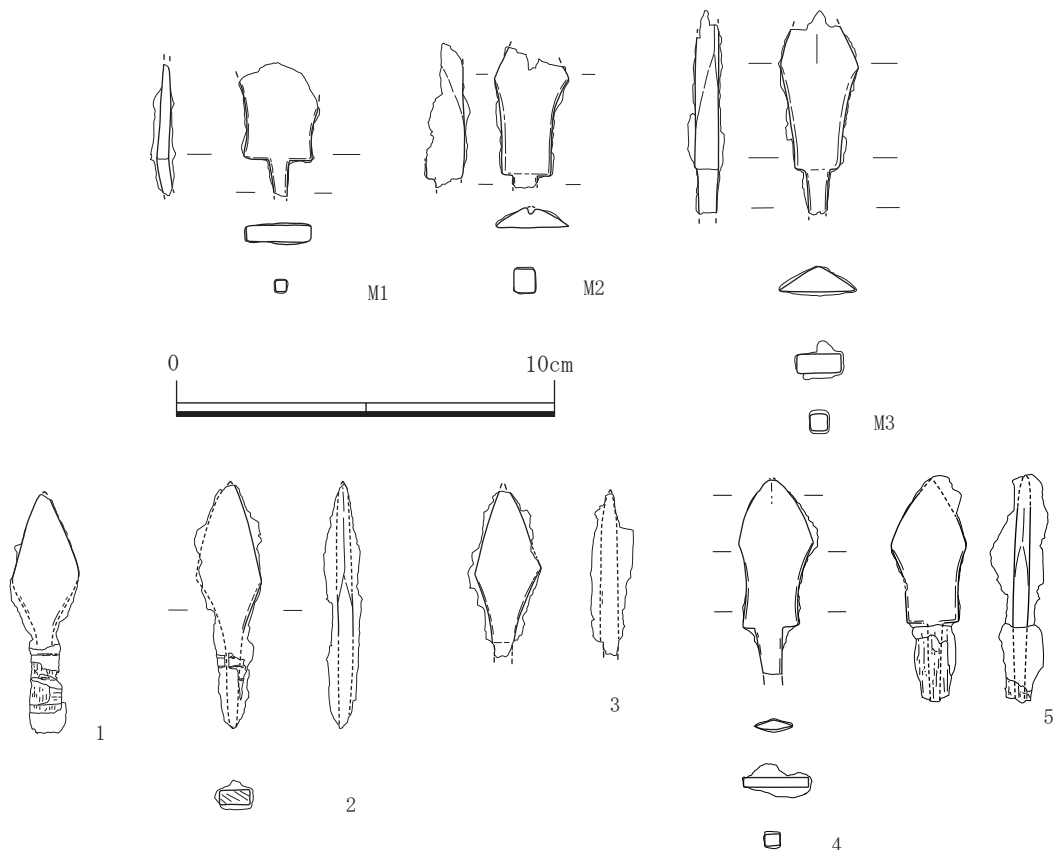
定角A式の3型式の編年的位置については、共伴遺物でみると、一部に舶載三角縁神獸鏡のみで構成される鏡組成の古墳があるものの、大半は舶載三角縁神獸鏡のうち、最新型式と理解される波文帯鏡群と、仿製三角縁神獸鏡が共伴する古墳、縦矧板革綴短甲、方形板革綴短甲といった甲冑や、筒形銅器との共伴が示される。

上記の鉄鏃の編年観を、地域史の中に位置づけるための手続きとして、讃岐地域の古墳編年（大久保 2013）との位置づけの対応関係を確認しておこう。讃岐地域内の古墳編年案に上記の副葬品の組み合わせを勘案して大まかに対応関係を想定すると、舶載三角縁神獸鏡のみで構成される鏡組成は、讃岐2期に相当する。仿製三角縁神獸鏡の共伴が認められ、帯金式甲冑の成立以前の段階の甲冑・筒形銅器の共伴という点からは、讃岐3～4期の年代観が想定できる。上記のように整理すると、三谷石舟古墳出土鉄鏃の年代観は、既往の研究に基づく讃岐2～4期に相当すると整理することができる。

第2項 県内の類例

対象資料の編年的位置をより絞り込むために、まずは類例資料の検討を行いたい。県内では三谷石舟古墳と同様に定角A式の鉄鏃が出土した事例は2例ある。

快天山古墳例は、かつて保管の経緯の中で混乱が生じ、高松市茶臼山古墳出土資料として保管されていた資料である（松本ほか 2008、以下報告文と呼称）。その後、調査時の写真との突合により、



M1～3：三谷石舟古墳、1～3：快天山古墳、4・5：ハカリゴロー古墳

※全て筆者実測

図6-1 三谷石舟古墳鉄鏃と県内の類例

快天山古墳出土鉄鏃であることが明らかになった（乗松・高上 2014）。本稿を成すにあたり、全点を実見したところ、群としての特性を以下のように整理可能である。まず、平面形については、いずれも関部が明確でなく、鏃身部下半からなだらかに茎部に連続する。一点報告文に段関が図示された資料(3)があったが、実見したところ錆膨れが顕著であり、X線にも関部は明確に確認できない。一方で鏃身部は小型だが厚みのある重厚な造りのものと、やや扁平なもの(2)の両者が認められる。報告文では片鏃が図示されるが、錆びによりこれも確認できる状態ではなかった。小型で重厚であるが、明確な関部を有さない形態は他に類例が見られない。ここでは、後述するが定角式の形態規範が大きく弛緩した資料として考えておきたい。

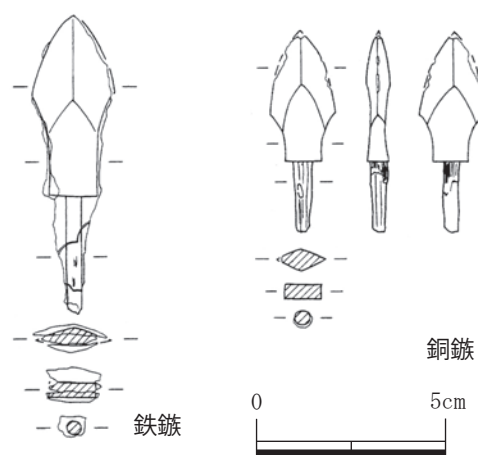
ハカリゴロ古墳例は、刃部の緩やかに湾曲する形態から、定角A式の3型式に相当する。遺物の立体感に着目すると、全体に厚みが薄く、平板な形態である。このため、刃部の鏃等も明瞭でなく、全体的に扁平な印象を持つ。茎部から刃部まで厚みに差が無い点もあわせると、製作に当たっては、鑿切りによる成形が想定される。三谷石舟古墳のM1に類似した製作技法であると考えられる。

このように、県内の類例をみていくと、同じ形式の鉄鏃においても、平面形と共に側面形（厚み）に差異が認められることが分かる。以下では予察的な作業であるが、この差異が編年上の指標として評価できるかどうかを検討したい。

第3項 形態変化と編年的位置に関する予察

三谷石舟古墳鉄鏃のように小型・重厚な鉄鏃は、古くから銅鏃と形態が共通することが知られる（後藤 1939）。松木武彦は、小型・厚手の鉄鏃及び同様の形態の銅鏃で、類型的・規格的な資料群に「有稜系」の名称を与えた。こうした有稜系鉄鏃の製作技法としては、丸鍛えによる生産が想定される（村上 2003）。有稜系鏃の変遷観について、成立過程についての論考は特に多いが、成立後の変遷についての論はあまり多くない。銅鏃については前期後半になって、規格性が喪失する過程が確認されており、形態の変化、規格性の喪失、数量の減少と銅質の悪化等が関連する事象として提示される（松木 1991・1992）。有稜系鏃の威信材としての機能の低下を背景に進んだと考えられる変化について、これまで形態変化の容易な銅鏃に対して指摘されてきたが、鉄鏃においても規格性の喪失に伴う退化現象を読み解くことが可能ではないかという推論を提示したい。

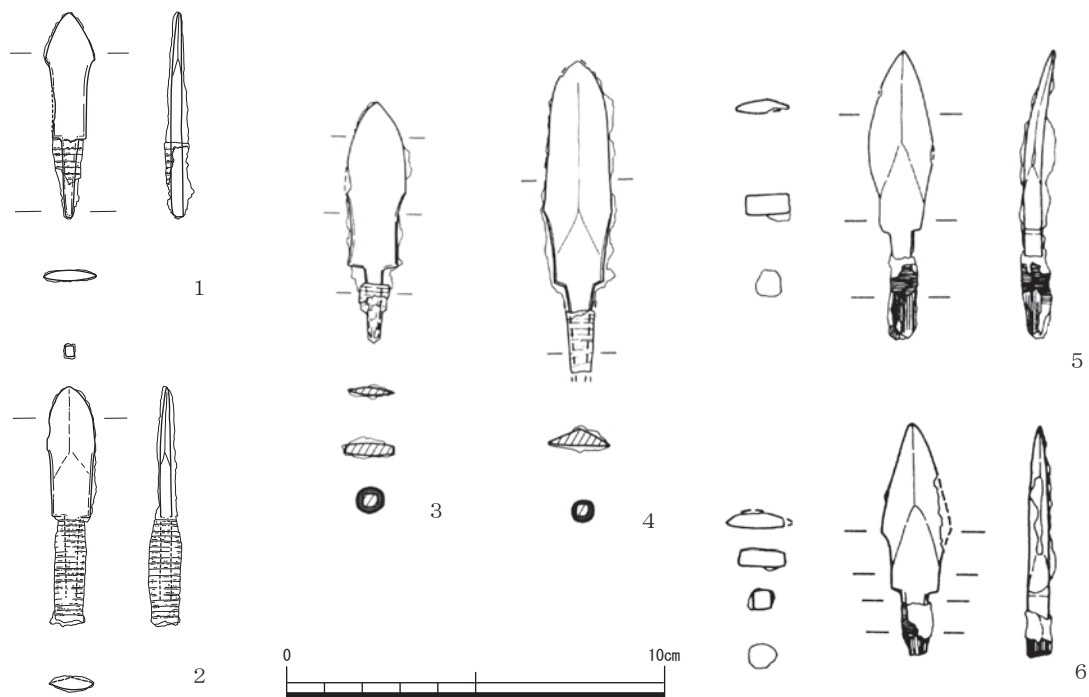
規格性の喪失を論じる前に、まずは前提として定角A式の鉄鏃・銅鏃についての形態上の規格性（図6-1）を具体的に整理しておきたい。まずは鏃身部の平面形態である。刃部形状は直線的なものとやや曲刃の資料が鉄・銅ともに認められる。鏃身部については幅に対して長さの比率が概ね1：2の範囲に収まる。また、関部は直線的な直角関で、茎部との間に明瞭な段を成す。側面形では茎部に対して鏃身部が厚く、このため関部に明瞭な段を有する。以上の形態的特徴を、異なる素材間で実現するところに、高い規格性を読み取ることができる。



※報告書より転載

上記の規格性の弛緩によって鉄鏃に生じる具体的変化としては、以下の類型が想定される。ま

図6-2 鉄鏃と銅鏃に見られる形態の規格性
（寺戸大塚古墳）



1・2：瓦谷1号墳、3・4：紫金山古墳、5・6：庭鳥塚古墳

※1・2は筆者実測、3～6は報告書より転載

図6-3 規格性の弛緩した定角式鉄鏃の事例

ずひとつ目には、鏃身部の厚さが薄く平板になり、結果茎部と鏃身部の厚みの差が無くなることによって、関部の段が無くなるパターンがある。鏃の製作技法からみると、丸鍛えから簡易な鍛打あるいは鑿切という、製作技法上の変化と表現することも可能である。もう一つは、鏃身部が長くなる、刃部が短くなる、あるいは快天山で見られたように関部が不明瞭になるといった多様な形態の変化が想定できる。平面形態における規格の弛緩と、厚みの遞減は同時に生じることもある。

上記の形態弛緩のパターンが認められる資料は、管見の及ぶ範囲では香川県快天山古墳例をはじめ、京都府瓦谷1号墳、紫金山古墳、庭鳥塚古墳等が挙げられる。なお、今回挙げた特徴は鏃の側面観の観察が重要な指標となるが、鉄製品全般の資料的特徴と観察・図化の精度の進歩から、古い調査資料を中心にこの点に観察が及んでいない資料が多い。今回参考事例を十分に実見することが出来ていないが、今後実見を重ねると資料数は増加するものと考えられる。このため、結論は改めて資料実見の母数が一定量に達した段階で改めて提示する必要があるが、現在確認出来ている資料では、前期前半に遡る古墳では確認できていないため、こうした形態変化は前期後半に生じた現象である可能性が高い。

上記の理解が正しければ、三谷石舟古墳鉄鏃のうち、M2・3は重厚な鏃部を持ち、先端が不明であるがM3の鏃身部下半が若干長くなっている可能性があるものの、形態的に大きく規格から外れていない。一方で、M1は平面形態が不明瞭であるが、鏃身部が平板であり、関部に段を有さない点からも規格の弛緩した資料と評価できよう。上記の変遷観から見ると、M2・3がより古相を呈す資料で、M1は新相を呈す資料であると言える。いずれも表土中の採集資料であり、また先端の欠損等により重要な情報が失われている点は考慮する必要があるが、仮にこれらが一括の資料であったとすると、M1の存在から讃岐3～4期に相当すると考えられる。一方でM2・3は古相を示し、県内資料では快天山古墳例よりも明らかに先行すると考えられる。元より鉄鏃のみで古墳の年代を

決定することは適当でないが、可能性としては讃岐3期でも最初段階に位置づけることも十分可能であろう。

このように、三谷石舟古墳出土鉄鍬はある程度年代幅を持つ資料であることがうかがえる。この年代幅は、三谷石舟古墳の年代を検討する上で重要な振り幅であると考えられる。埴輪類と総体的に検討する必要があるが、少なくとも鉄鍬からは、三谷石舟古墳の年代を、石棺の年代観から想定されたように必ずしも前期末に位置づける必要が無くなるという可能性が開かれる。(高上)

第3節 三谷石舟古墳の築造時期と石棺製作時期について

三谷石舟古墳石棺の製作時期は三谷石舟古墳の築造時期の特定からあらためて検討する必要がある。その場合、今回調査で検出した土器類が重要な手がかりとなる。また埴丘形態と外表施設構造もまた時期比定の有力な補強材料となる。

上述のとおり後円部上面で検出した土器類は広口壺を主体とする。なお後円部裾・石舟池畔でも崩落した埴丘構築材に混じり同種土器若干の散布を確認している。底部穿孔の有無は確認できていないものの壺形埴輪と見てよいだろう。ただし若干の小形壺が伴う可能性も付記しておく。重要な点は定形化した普通円筒埴輪を伴わないことである。なお先行時期の筒形を指向した特異な埴輪-船岡山1号埴輪あるいは稲荷山姫塚古墳埴輪等-も存在せず、単口縁広口形態の壺形埴輪を単独で配列した可能性が高い。

讃岐地域における定式化した普通円筒埴輪の初現例として姫塚古墳、西井坪1号墳、快天山古墳を挙げることができる。これらでは朝顔形円筒埴輪や器財形埴輪は伴わない一方で壺形埴輪を併用する。壺形埴輪の単独使用事例は鶴尾神社4号墳、丸井古墳、鶯ノ部山古墳、野田院古墳など、前期前半段階の諸墳で確認できる。また中期初頭のけぼ山古墳やそれより下の西井坪2号墳も壺形埴輪を単独で用いるが、それらでは体部の筒状化が進展し、中形壺の基本形態から大きく変化しているので前半期の諸例とは容易に区別できる。一方、上述の鶴尾神社4号墳や快天山古墳などの壺形埴輪は体部形態や仕上げ手法の点で通例の広口壺と異なる点はなく、単に底部に小孔を穿つことで仮器化するにすぎない。

三谷石舟古墳では円筒埴輪を伴わない。壺形埴輪は強く張った球形の体部を作り出し、一部に肩部の篋磨きを施すなど広口壺一般の特徴を具える。所用埴輪からは三谷石舟古墳を、快天山古墳や石清尾山姫塚古墳に先行する時期の所産と位置づけなければならない。

次に埴丘形態と外表構造からこの所見を補強しておこう。紙幅の都合もあり、ここでは要点のみ示す。國木健司氏を中心に実施された埴丘測量の成果が1992年に公表され、埴丘形態の詳細な検討が可能となった。國木氏は測量報告で埴丘主軸長88mと復元し、低い基壇の上に前方後円形の埴丘を築く形態を推測した。1995年蔵本晋司氏は、國木氏が基壇とした部分を後円部基底と見なす新たな復原案を示し、埴丘主軸長を95.7mとした。埴丘形態の理解に関わるので筆者の所見を示す。國木氏のいう基壇を埴丘本体と捉える蔵本氏の理解を基本的に支持することを前提に、埴丘主軸長を $103\text{ m} + \alpha$ と復元する。旧地形を踏まえて前方部前面の切通し状地形を埴丘前面の区画溝とみなす。また石舟池の造営と以後の浸食で損傷した後円部裾(東・北面)の状況に注目する。侵蝕面には埴丘基底部の外周施設を反映する多数の石材が露呈している。崩壊は進んでいるが原構造を留める部位が残ると判断する。以上から上記の埴丘規模を推測した。

さてその上で埴丘形態に注目する。第一に注意したいのは前方部の側面観である。前方部埴丘は

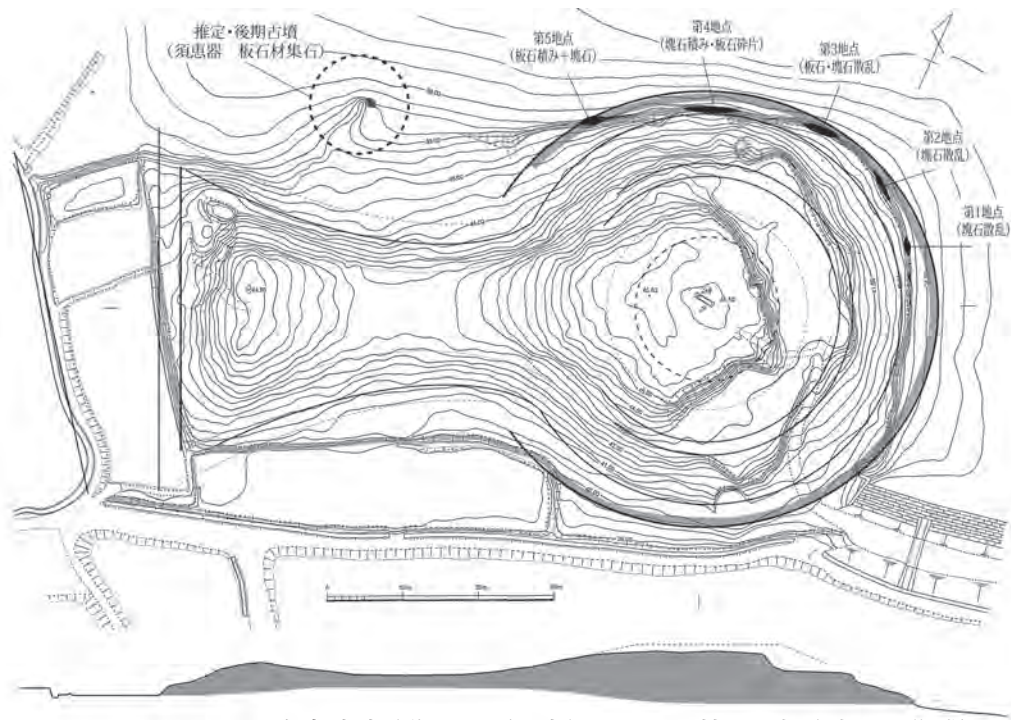


図6-4 三谷石舟古墳墳丘復元図（國木編 1992 を基に一部改変して作成）

先端の一部を除き総じて良好に遺存する。後円部丘から緩やかに下降しくびれ部～前方部中程までの上面は、概ね現後円部上面より 3.2 m 低い。そこから前端に向けて緩やかにせり上がり、約 1.6 m ほど高さを増しこれに応じて前方部側辺も幅を大きく広げる。なお石棺の据え置き状況から現在の後円部上面は少なくとも 1 m 前後は削られているとみる。くびれ部で大きく下降し、中程から先端に向けて大きく隆起する前方部側面観は高松茶臼山古墳や猫塚古墳など前期前半段階新相に典型的に見いだせるものである。一方、石清尾山姫塚古墳や快天山古墳など後半段階古相の前方後円墳ではなくくびれ部を含め前方部全体の立体的造形を指向し、その分、先端隆起は弱化する。本墳の側面観は前期前半段階古相、つまり快天山古墳等に先行する様相を具えていることになる（図6-4）。

次に池畔侵蝕面に露出した石材から墳丘外表構造を検討する。後円部裾部の削り取りと侵蝕により、現状では半ば以上崩壊した外表構造の構成石材が断続的に露呈している。顕著な 5 地点を写真 6-1 に示した。1・2 地点では辺数十 cm 前後の大形塊石が集中する。3 地点では同様の塊石と大ぶりの板石材が混在する。4 地点では三段以上積み上げた塊石材が侵蝕面に露出し、周囲には崩落塊石材と碎片化した板石材および小円礫が散乱する。5 地点では塊石材の前面で積み重ねた板石材が半ば崩れながらも残る。

以上から後円部基底の外表構造をある程度推測することができる。裾部の外表施設は板石材と塊石、小円礫で構成される。4・5 地点の状況を積極的に評価すれば、数十 cm 大の塊石を積み上げた前面に板石材を積んだ重厚な石積み段の存在が復元できる。こうした構造は前期前半段階の稲荷山姫塚古墳、船岡山 1 号墳などで典型的に観察されるものである。快天山古墳では墳丘斜面に礫を差し込む通有の形態に代わっている。もっとも積石古墳では前期後半段階にも石積み段形態は残る。しかしその場合でも姫塚古墳、北大塚古墳、石船塚古墳では奥部の塊石積み部分を整える、前面の板石積み部を略す構造に変化し、今復元した三谷石舟古墳のそれとは異なっている。

以上、前記した検出土器の所見と一致して、三谷石舟古墳は快天山古墳より先行する時期の特徴的な要素を具えていることを墳丘形態-前方部側面観-と墳裾外表構造から示した。三谷石舟古墳は快

天山古墳に先立ち、おそらくは前期前半新相段階の所産と位置づけなければならない。したがって、三谷石舟古墳石棺の製作時期も自ずと快天山古墳石棺以前に捉え直す必要がある。

これまで前期刳拔式石棺の編年は、割竹形石棺→舟形石棺の基本構図を所与の前提として、棺身・蓋を合わせた断面形が正円に近似するほど古相に、そこからの形態的な距離を時間差に置き換える形で構想されてきた。その結果、棺身底部に幅広い平坦面を作り出す三谷石舟古墳石棺は型式組列の末尾付近に置かれてきた。しかし割竹形石棺→舟形石棺の構図を支えた古式の刳拔式石棺＝真正の割竹形との理解はたとえば兵庫県権現山51号墳や滋賀県雪野山古墳が示すように成り立たない。古式の刳拔式木棺は必ずしも理念的な割竹形を呈さないのである。また土製棺ではあるが、限られた製作期間に多様な棺形態が共存することを示す中間西井坪遺跡も上記の構図を見直すべきことを示唆している。

今回、三谷石舟古墳築造時期の検討を通じて、三谷石舟古墳石棺の製作時期が大きく遡上することが明らかとなった。古墳時代前期における刳拔式石棺編年の改訂を余儀なくさせる成果である。また棺身底の形状を重視して、三谷石舟古墳石棺と同じように型式組列の後方に置かれた善通寺市磨白山古墳石棺の編年的位置も再検討を要するだろう。磨白山古墳もまた円筒埴輪を伴わない可能性が高く、かつその墳形も古い様相を帯びているからである。(大久保)

<参考文献>

大久保徹也 2013「津田湾・津田川流域に所在する前半期主要古墳の編年の整理」『津田古墳群調査報告書』第2分冊考察編 さぬき市教育委員会

川畑純 2009「前・中期古墳副葬品の変遷とその意義」『史林』92巻 2号 京都大学

國木健司編 1992『三谷石舟古墳測量調査報告書』高松工芸高校郷土史研究会

蔵本晋司 1995「香川県高松市三谷石舟古墳の再検討」『香川考古』第4号 香川考古刊行会

後藤守一 1939「上古時代鉄鏃の年代研究」『人類学雑誌』54-5

乗松真也・高上拓 2014「富丘頂上古墳の研究」『香川考古』第13号

松木武彦 1991「前期古墳副葬品の成立と展開」『考古学研究』37-4

松木武彦 1992「銅鏃の終焉」『長法寺南原古墳の研究』大阪大学考古学研究室

松本和彦・西澤昌平・杉山和徳 2008「高松市茶臼山古墳出土鉄製品の基礎的研究」『調査研究報告』第4号 香川県歴史博物館

向日市埋蔵文化財センター 2001『寺戸大塚山古墳の研究』I 前方部副葬品研究篇

村上恭通 2003「大和における古墳副葬品の形成 - ホケノ山古墳出土品を中心に -」『初期古墳と大和の考古学』学生社



第1地点



第3地点



第4地点



第5地点

写真6-1 池畔浸食面に見える墳丘構造



足側小口内面



左外側面



左内側面



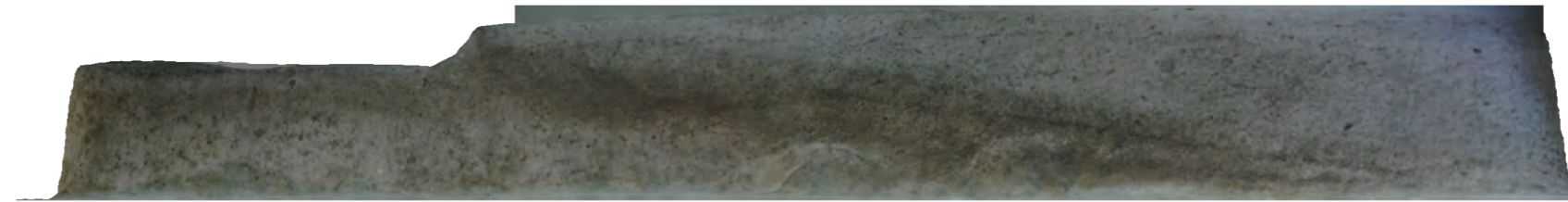
頭側小口外面



頭側小口内面



平面



右内側面



足側小口外面



右外側面





左外側面



左内側面



表面

石船石棺オルゾ①



右内側面



右外側面



頭側小口外面



頭側小口内面



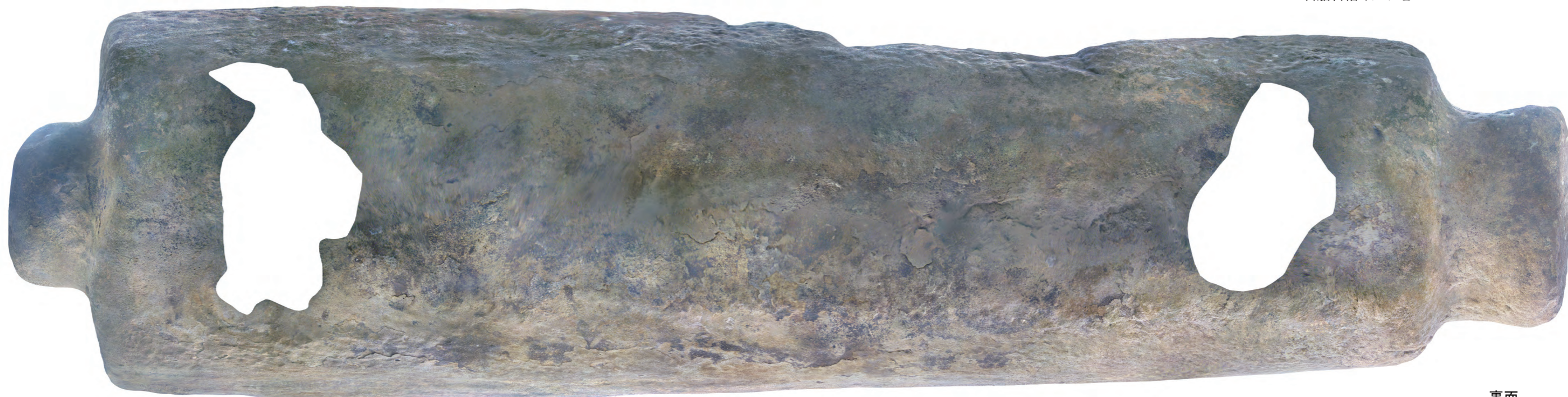
足側小口内面



足側小口外面



石船石棺オルソ②



裏面



頭側小口



足側小口



右外側面



右内側面



平面



左内側面



左外側面



裏面



三谷石舟古墳 清掃後状況（南東から）



三谷石舟古墳 石棺周辺の円礫集中状況（南東から）



三谷石舟古墳 南東側の縄掛突起



三谷石舟古墳 側面の突帯



三谷石舟古墳 石棺と円礫の位置関係（南から）



南トレンチ完掘状況（南から）



三谷石舟古墳 石棺と円礫の位置関係（北東から）



三谷石舟古墳 崖面の盛土観察（北東から）



三谷石舟古墳 石枕（南東から）



三谷石舟古墳 石枕（北東から）



三谷石舟古墳 枕の立体感（南東から）



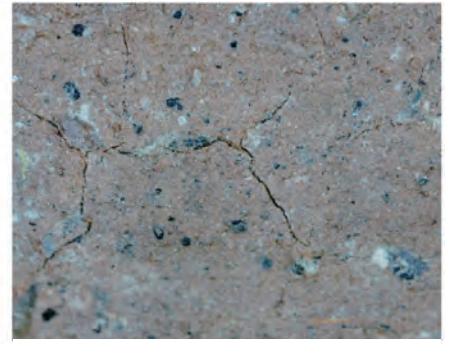
三谷石舟古墳 北西側の小口（北西から）



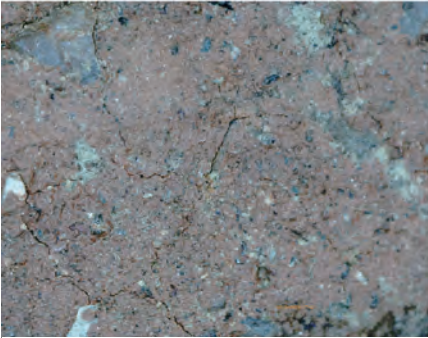
三谷石舟古墳 底面の調整（鏡で撮影）



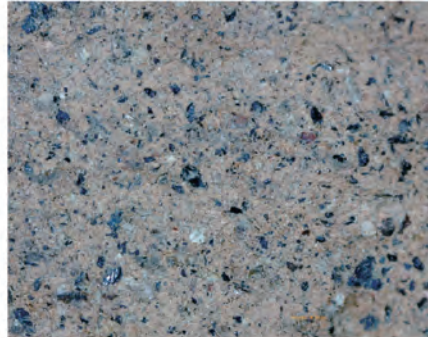
北トレンチ南端部断面（東から）



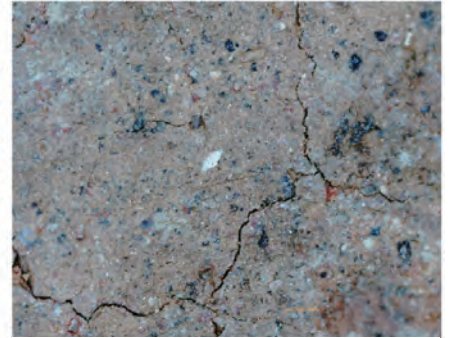
素地配合砂礫の様相（図 3-5-1）



素地配合砂礫の様相（図 3-5-3）



素地配合砂礫の様相（図 3-5-4）



素地配合砂礫の様相（図 3-5-5）



素地配合砂礫の様相（図 3-5-6）



素地配合砂礫の様相（図 3-5-9）



素地配合砂礫の様相（図 3-5-10）



素地配合砂礫の様相（図 3-5-11）



素地配合砂礫の様相（図 3-5-12）



素地配合砂礫の様相（図 3-5-15）

素地写真は 65 倍接写撮影を約 1/10 に縮小して掲載



素地配合砂礫の様相（図 3-6-16）



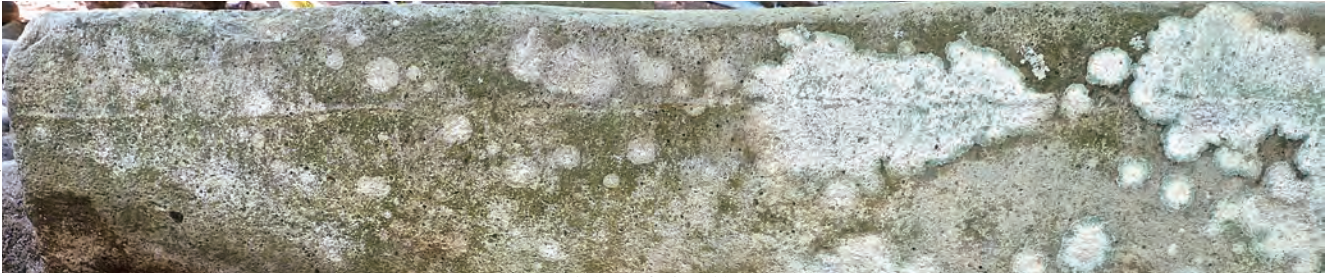
鉄鏃 M1 (1/1)



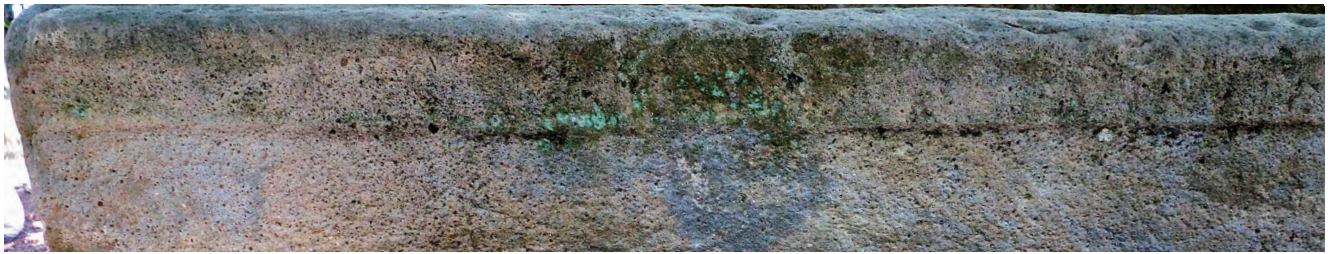
鉄鏃 M2 (1/1)



鉄鏃 M3 (1/1)



右側縁突帯の撓み



左側縁突帯の撓み



右側縁抉れ部の鑿痕



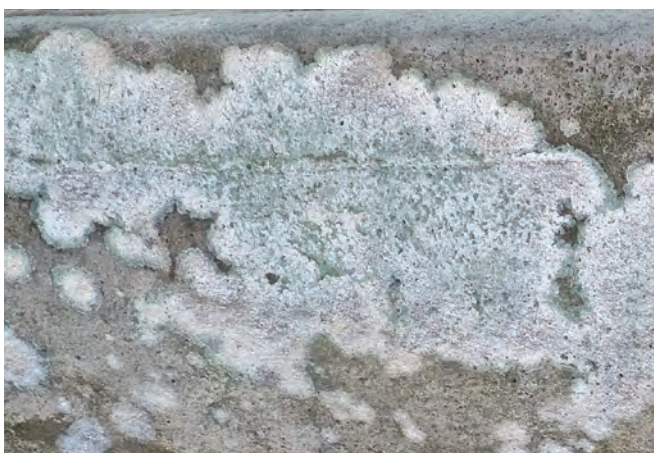
石枕外周隆帯の立上り



足辺突起部の鑿痕



石枕外周隆帯の立体的装飾



右側縁斑文状劣化部



棺上面頭辺の方形削込み



棺上面足部の半円形削込み



石船石棺覆い屋の現況（南から）



石船石棺 現況（南西から）



石船石棺 石枕周辺（南西から）



石船石棺 石枕下部の叩打痕（東から）



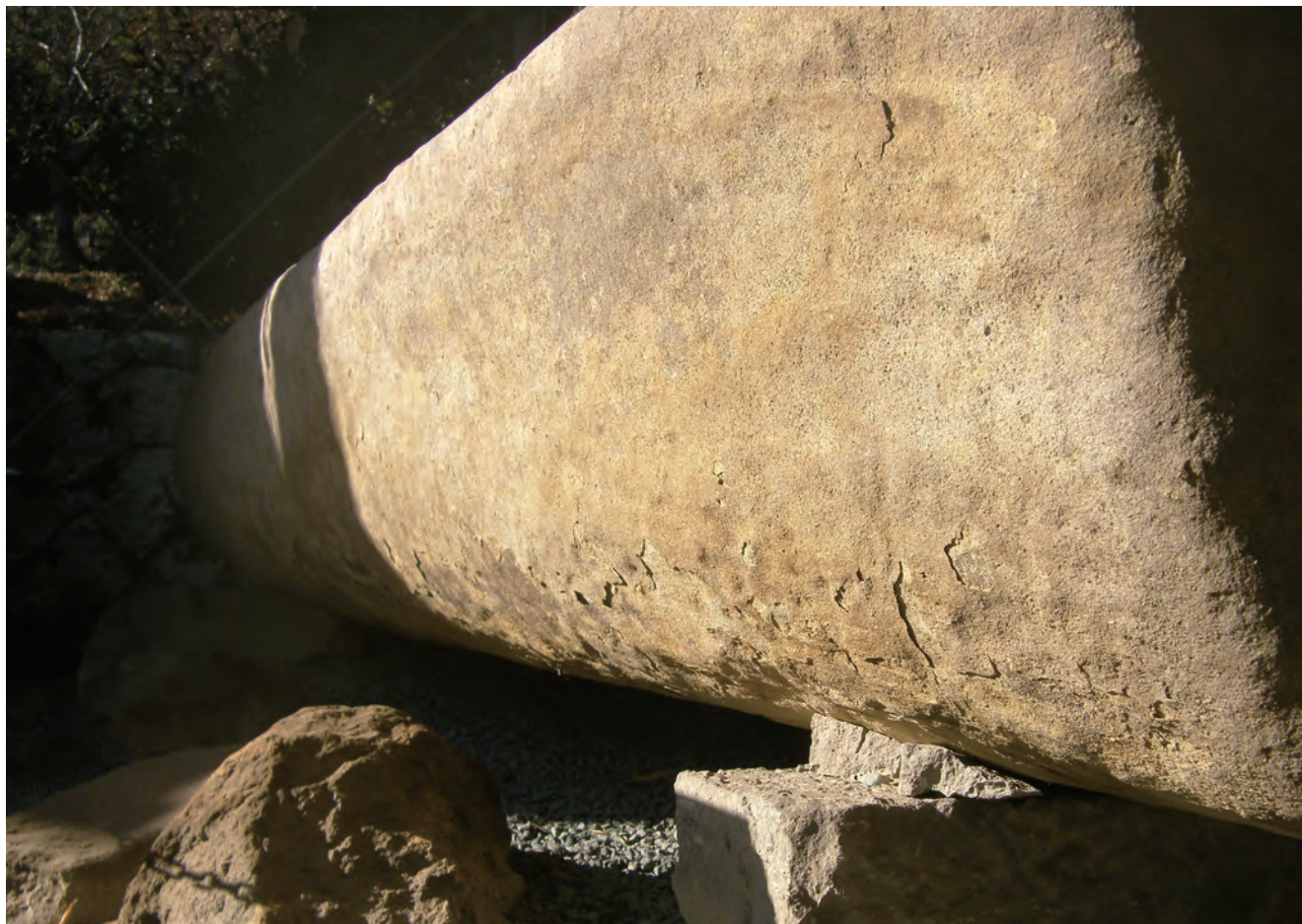
石船石棺 外面下半の叩打痕（南から）



石船石棺 縄掛突起の叩打痕（東から）



調査風景



石船石棺 外面下半の剥離状況（南東から）



石船石棺 外面下半の剥離接写①



石船石棺 外面下半の剥離接写②



石船石棺 外面下半の剥離接写③



石船石棺 外面下半の剥離接写④



鷲ノ山 石切丁場跡の崖面①



鷲ノ山 石切丁場跡の崖面②



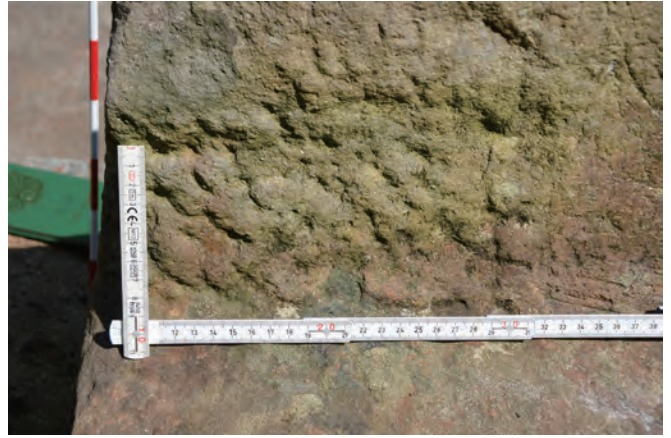
浅野小学校石棺 現況（北東から）



浅野小学校石棺 側面の突帯（北東から）



浅野小学校石棺 現況（西から）



浅野小学校石棺 小口破壊時の調整（北から）



浅野小学校石棺 内面底部付近の調整接写（北東から）



浅野小学校石棺 内面底部付近の調整（北東から）



浅野小学校石棺 石枕の遺存状況（北東から）



浅野小学校石棺 小口側に回り込む突帯（北西から）

報告書抄録

ふりがな	たかまつしないしよざいくりぬきしきせつかんちようさほうこくしょ1							
書名	高松市内所在刳抜式石棺調査報告書 I							
副書名	高松市教育委員会・徳島文理大学文学部連携協定調査報告書							
巻次	第4冊							
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第219集							
編著者名	大久保 徹也(徳島文理大学文学部) 高上 拓(高松市)							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目 8 番 15 号 TEL087-839-2660							
発行年月日	西暦 2021 年3月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	しよざいち 所在地	コード		北緯 ° / ' / ''	東経 ° / ' / ''	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みたにいしふねこふんせつかん 三谷石舟古墳石棺	かがわけんたかまつし 香川県高松市 みたにちよう 三谷町	37201		34° 16' 10''	134° 04' 30''	2016. 8. 16～9. 1	10 m ²	重要遺跡 確認調査
あさのしょうがっこうしよざい せつかん 浅野小学校所在石棺	かがわけんたかまつし 香川県高松市 かがわちよう 香川町	37201		34° 15' 32''	134° 02' 28''	2017. 8. 17～21	- m ²	重要遺跡 確認調査
いしふねせつかん 石船石棺	かがわけんたかまつし 香川県高松市 こくふんじちよう 国分寺町	37201		34° 17' 01''	133° 56' 43''	2018. 8. 20～22	- m ²	重要遺跡 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
三谷石舟古墳 石棺 浅野小学校所 在石棺 石船石棺	古墳	古墳時代 前期	刳抜式石棺	埴輪・鉄鏃		石棺の保存を目的 とした現況調査		
要 約	高松市内には4基の讃岐産刳抜式石棺が存在する。このうち、国指定史跡石清尾山古墳群の保存活用計画を検討する中で、石船塚古墳石棺の保存対策を優先課題として検討する必要性が生じた。検討の第一段階として、市内にある石棺の現状を調査し、比較検討の基礎資料を作成することを目的として現況調査を行った。調査項目は主に①形態・②加工痕等の調整、製作技法③劣化の状態である。							

高松市埋蔵文化財調査報告第219集
高松市教育委員会・徳島文理大学文学部連携協定調査報告書
第4冊

高松市内所在刳拔式石棺 調査報告書 I

2021年3月31日

編 集 高松市教育委員会・徳島文理大学文学部
高松市番町一丁目8番 15 号
発 行 高松市・高松市教育委員会
印 刷 有限会社 中央ファイリング